
嫌われ者は霊使い！？

k e n

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嫌われ者は霊使い！？

【Nコード】

N8855S

【作者名】

ken

【あらすじ】

外道で霊使いの主人公が嫌われ？ながらも麻帆良で頑張るお話。

注意 この物語には、

ご都合主義と独自設定・解釈、チートが大量に含まれています。

プロローグ（前書き）

初心者なのでお手柔らかにお願いします。

アドバイスや感想待ってます。

特にアドバイスの方を。

プロローグ

場所は森の中、時刻は深夜2時。そこに彼は居た。
彼の前には今直ぐにでも息絶えそうな鬼が一人。その鬼は体中から血を流し立っているのもやつの状態だった。

——ズシャ

程なくして鬼は遂に立つことさえまなくなり、彼の足元へと崩れ去った。そして暫くして鬼は死んだ（・・・）。

その鬼は本来なら此処には居るはずがない者だ。大抵そういった鬼や魔物の類は術者によって召喚あるいは使役される。それはこの鬼とて例外ではない、きっとこの鬼も何処かの術者に召喚されたのだろう。

だが召喚された鬼や魔物は死ぬことはない。

一部例外も在るが、そういった召喚された鬼が死ぬことはない。

『鬼は負けないから』なんて理由ではなくただ単に鬼は還るからだ、元居た場所、術者に喚ばれる前に居た場所へと。

だが彼の前の鬼は還った（・・・）のではなく、死んだ（・・・）のだ。

そして彼は既に息絶えた鬼に向かって手を突き出し、招く様に手を動かしながらゆっくりと鬼に囁くささやくのだった。

——おいで、おいで。と

▲ ▲ ▲

「ふう、今回も上手くいったな。」

単独行動をしたのが運の尽きだったな鬼ちゃんよ。

まあ、俺が一般人だと思って油断して襲って来たつ、ても在るけど俺は間違いなく一般人だからそこはしょうがないだろう魔法は使えないし魔力も一般人のそれだしね。

でも、摩力が無いからって他にも鬼を倒す方法はいっぱい在るんだ、銃とか刃物とか。

魔力が無いからって油断したのは、しょうがないとは言えないね。次からは気をつけるよーに。

「って、今更もう遅いか。」

ね、鬼ちゃん？

ウゝアゝアゝアゝアゝー

鬼だった（・・・）物は今はもう体は無く、ただ霊体が俺に纏わり付いただけだった。

でもしょうがないよ。

まさか俺が《霊使い》なんて夢にも思わなかっただろうし――。

『自称だけどね。』その言葉を最後に、俺は森の奥へと消えて行った。

プロローグ（後書き）

どうでしたか？

主人公は、自覚無しの外道。で行きたいと思います。

書き方がまだ安定していないのでアドバイスよろしくお願いします。

1 幽霊（前書き）

1 話投稿

展開が早いです。

グダグダの駄文ですがどうぞ！

1 幽霊

ふわぁーああ。

俺はアクビを噛み殺す。

眠い、果てしなく眠い。結局昨日は2時から4時まで2時間粘ったが、結局成果はあの鬼一匹だけだった。

「はぁ〜鬱だー。」

学校に行きたくないー、行きたくないで御座るうー。」

最早布団からすら出たくない。

ゴロゴロと布団の中で転げ回る。

「今日サボっていいかな？」

体に纏わり付く霊達に話し掛けて見るが……

『『『『ウゝアゝアゝアゝアゝ』』』』と唸るばかり。

やっぱり無駄だよなぁ〜。

言葉を話したり、意思疎通をするにはもっと霊体喰わせて成長されるか、高位の霊が強い意思を持った霊を見つけないとなぁ。

ついでに言つとくと、今纏わり付いている霊共は一匹を除いて、他は全ていずれ餌になる予定だ。

殆どは下級で、昨日の様に麻帆良学園の森に深夜侵入してくる術

者が呼び出した、下級の鬼や魔物を殺し、死んでもこの世に未練があつて（鬼等は殆ど未練がある）霊になった所を甘い言葉やその未練を利用したりして主導権を奪う一度主導権を奪えば後はコツチの物だ。

餌にするもよし戦わせるのもよしの何でもござれだ。

だが、本気で一生一緒に戦つて欲しいならそれじゃ駄目だ。

幾ら従わせる事が出来ても、無理矢理押さえ付けたのでは殆ど力を発揮することは出来ない。

当然と言えば当然だろう。

無理矢理動かされて力を発揮出来る訳もない。

だから俺は探している。

一生一緒に居てくれるパートナーを……。

あと彼女も……。特に彼女！絶賛募集中です！！

よし、学校へ行こう！出会いを求めて！！

男子校なんだけどね。（グスッ

▲ ▲ ▲

到着！

よし、教室に入ったらまず寝よう、すぐ寝よう。

俺はそう決意して教室へと向かう。

「おはよー。」

「……………」

あ、あれ？おかしいな（汗） いつのまに俺ハブラレたんだろう、
なんだか目から変な汁が……………！

そつだ！忘れてた！今霊纏ってるから存在感薄く成ってたぜ！

あぶねえ、あぶねえマジ泣きする所だったぜ。

おりゃ！どっか行ってる。

シツシツと霊を払うとようやく皆に俺の存在を気が付いて貰えた。

「うおっ！いつから居たんだよお前。」

そんなに驚くことか？

「なにそんなに驚いてんだよずっと居たじゃん」

「マジかよ。全然気が付かなかった。

ってゆうかお前って、たまにすっげー影薄く成るよな。」

「黙れ、モブA。」

「ちょ！モブは酷くない？」

るせーな。影が薄く成るのは霊を纏ってるからだって。

さてと、モブAがまだ何か言ってるが無視して今日も夜に備えて寝るとするか。

授業時間＝睡眠時間だ。JK（常識的に考えて）。・

・
・
・

やあ、こんばんは只今の時刻は0時ジャスト。

昨日よりも2時間ばかり早いです。

幾ら授業中寝てても流石に2日連続で4時就寝はきついです。

「しっかしもう一年か……」

俺が霊集めを始めたのは一年前に成る。

あの日俺は丑三つ時にこの森で藁人形に釘を打っていた……理由は聞かないで欲しい。

前々から霊は見たし、そこら辺の地縛霊とかを面白半分で従わせて遊んで足りと今とそんなに変わりはないかった。

俺の両親は魔法関係者で既に魔法の存在は知っていたが。

残念ながら俺は魔力は一般人並で才能は全くない落ちこぼれ。

そのため俺は魔法生徒にも成ることなく、両親と他の魔法生徒達からの《落ちこぼれが。》と蔑む様な目に晒され続けた。

今思えば霊と積極的に関わって来たのは自分の唯一特技を伸ばそうとしたからかも知れないな。

おっと話が逸れたね。

とにかく俺はあの日初めて鬼を殺した。

おふざけで従えていた霊共じゃあ全く話に成らない程鬼は強かった。

正直俺は此処で死ぬかもって思った位だ。

でも俺は死にたく無かった、だから必死になって考えたんだ、ど

うやればコイツから逃げれるか、どうすればコイツを倒せるのか、をね。

そして閃いた霊に霊を喰わせる事を。

1番強かった霊に他の霊を全て喰わせた。

その時霊は格が上がり実体化する事を初めて知った。

それからの戦いは一方的だった、霊を操り実体化した部分で鬼を切り刻んで締め上げて終了。

なんとも呆気なかった。それから俺はほぼ毎日の様に深夜森に行っては、こつこつと霊を集めている。

少しでも周りを見返したくて……少しでも強く成りたくて。

立派な魔法使い（マギステル・マギ）なんざは、どうでもいいし、興味も無い。

最初は俺だつて憧れてたさ、まるで正義の味方の様で、俺もそうなるんだ！って本気で思ってたさ。

あのゴミを見るような目で両親が俺を見るまではね。今じゃもう完全に他人だ両親には毎月金を振り込む代わりに縁を切る。

見たいな事も言われたし。

今と成っては本当にどうでもいい事だがね。

おっと、そろそろ気を引き締めないといけないな。

俺は霊達に命令して周りを探索される。

勿論自分の存在感を薄くする為に幾らかの霊は残して置く。

俺は認識阻害すら使えないからね。

これはとても重宝するよ。

ナニカが探索に引っ掛かる。

ん？コイツは……ウケケケケ、これはこれは、は久し振りに中位の奴が来たな、しかも単独行動とはとても好都合だ。

今ならもう複数相手でも十分過ぎる程戦えるが念にを入れて一匹ずつにしている。死ぬの怖いし。

中位の近くに誰か居るな、数は二人で……戦っているのか？

まあ、十中八九魔法先生か魔法生徒だろう。

しかし困ったな、俺はこれまで誰にも見つかることなく、霊を集めてきたつてのに此処で出ていたら幾ら俺が霊を纏って存在感を薄くしても見つかるだろう。

いや、有りったけの霊を纏えばいけるか？　って、それじゃ戦えないか。

うーん、でもだからって中位はみすみす見逃すには惜し過ぎる、

俗に言う《ハイリスク・ハイリターン》って奴か……。

うし！一先ず有りったけの霊纏って様子を見に行くか！。

後はそれから考えよう。

・ ・ ・ ・

うわー、ヤバいじゃんあの二人。完全に捕まってるよ。

デブで不細工な鬼に首を捕まれてるし……。

何か喋ってるな、もうちょっと近くに行って見るか。

近づくにつれ少しずつ二人の顔の輪郭がハッキリとしてくる。

へえ、アイツは知ってるぞ、確か京都から来た、神鳴流の剣士だ。
可愛いしサイドテールが特長的だったからよく覚えてる。

もう片方は、褐色の肌で長い黒髪を後まで垂らして目つきは
鋭い、所謂三白眼と言っちゃった。

……知らん顔だが。可愛いな、なんとゆうか大人びていて胸もでかいし……。うん。ストライクだ。

俺は二人が危険な常態に陥っているにも拘わらず、バカな事を考えながら更に二人と一匹に近づいて行つた。

そろそろ話が聞こえて来たな……。うわー近くで見るとものっそいデブで不細工だな。略して、デ不細工。なんちつて。

俺は鬼のすぐ傍……。首を締め上げられている二人の後ろから、聞いていた。

「グヘヘ、久し振りの上玉だな。」

「クツ、私達を犯すつもりか！　ゲスがつ！」

神鳴流が、デ不細工に向かって悔しそくに言った。

「クソツ、私としたことが、油断した。」

同じ様に褐色の女も言う。

「そのゲスに犯され、辱められ殺されるお前は何なんだろうな？」
グヘヘヘとデ不細工はまたもや笑う。

そして、それを二人の後で聞いていた俺は……………

——ウケケケケケ。

……ブチ切れた。

▲
▲
▲

今コイツなんつった？

『久し振りの上玉』だと？

久し振りって事は前にも最低1度は同じ位のかわいこちゃんを犯してるって事だよな？

——ウケケケケケケケケ

しかも今は現在進行形で、あの二人を犯そうとしているだど？。

俺だってまだチェリーなのにあのデ不細工が、だ。

[illegible]

俺の中である感情が沸々と煮えたぎり、先程まで考えていた《ハ
イリスク・ハイリターン》の事などは、とつくにぶつ飛んでいた。
最早怒りと嫉妬で声を出して笑うのを我慢出来なく成るがもう構
わいやしない。

どうせコイツはここで死ぬんだからな。

[illegible]

俺は笑いを止める。

笑い声でコチラに気が付いたデ不細工をこれでもかと睨み。

そして有りったけの嫉妬と怒りを込めた声で、低く小さく呟いた――。

「てめえは俺を怒らせた。」

1 幽霊（後書き）

難しい。

読むのと書くのではこんなにも差があるとは……。

精進しますうー！。

この小説の幽霊は《ムヒヨとロージーの魔法法律相談事務所》の
幽霊をご想像下さい。

2 幽霊（前書き）

なんだか真名視点がおかしくなった。

半端ですがどうぞ！

2 幽霊

Side 龍宮 真名

「がはっ……。」

私と刹那は目の前の鬼に首を締め上げられる。

手は少しでも、首にかかる力を和らげ様と鬼の手を掴んでいる。

しくじった。本当にしくじった。

私はいつもの様に刹那に前衛を任せ自分は後衛で後から狙撃で刹那をサポートしていた。

学園長からの依頼と言っても、毎日毎日この麻帆良に侵入してくる、大して強くない化け物共を作業的に倒すのには飽き飽きしていた。

だが、私はプロだ。どんなに面倒臭くても依頼を受けた以上は完璧にこなすつもりだった。

きつと私は慢心していたのだろう。

今日もいつも道理、前衛と後衛に分かれ侵入者が召喚した化け物を殲滅していた。

化け物共の殲滅もいつもの様に順調に進み、遂には最後の一匹に成った。

此処で私はいつもならとるはずのない、有り得ない行動をとってしまった。

私は最後の化け物が最後の一匹なった所でライフルを背に仕舞いソイツに近づく。

たまにはガンⅡカタなどの近接戦闘の技術も使って見るか、と。

思えばそれが油断だったのだろう。

《戦場では油断は死を意味する。》そんな事はわかっていたし、その通りだとも思っていた。

だが今はどうだ？

手は鬼の手の力を弱めるのに必死で、武器を手にすることさえままならない。

分かっていても、理解していても。

私は心の奥で嘗めていたのだろう化け物共を、鬼を。

戦場で培った教訓も忘れ、油断して慢心して、このざまだ。

私は銃を持ち後から鬼へと仕掛けた。

鬼は醜く太っていた。そのせいで私は鬼は動きは遅いと決め付ける。

素早く鬼の後頭部へと銃口を突き付け銃弾を放つ……………前に私は迫りくる太い腕によって殴り飛ばされた。

気絶していたのだろう気が付いた時には刹那がその鬼と戦っていた。

刹那は押されていた。鬼の動きはその体型とは裏腹に予想以上に速く力は強く皮膚は硬かった。

「油断しました。」

刹那も振り返ちにあつたのだろう左腕を負傷していた。剣士にとって腕の傷は致命的だ。それ程深くはないが、少なくとも今は満足に戦え無いただろう。

《まだいける。》そんな事を考えていた自分を殴りたい。
負傷し戦闘に支障が出る場合は下がる。

これは常識だ幸い此処は森の奥一旦引き、援軍を求める時間は十分にある。しかも両方が負傷したと言うならば尚更だ。

だが、私は引かなかった

まだいける。先程は油断したからだ、と決めつけて。

ギリツと鬼の手の力が増す。

怖い。この鬼に犯され殺されると思うと身がすくむ。

なんとか生き残る為に打開策を考えるが、数ヶ所を同時に攻められたので、援軍には期待出来ない。

まず無理だろう。

手は少しでも力を抜けば鬼によって首を締め上げられ気を失うだろう。放すなんて論外だ。

八方塞がりとは実にこのこと、もうどうしようもない。

「……あす……けて」

無意識にそんな声が出た時だった。

「ウケケケケケケケケケケケ」

私達の後から奇妙な男の笑い声、知らない声だきつと術者か。成るほどお前も私達を犯すつもりか。

そんなに笑って、さぞご機嫌だろうな？

「ウケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ」

鬼はただでさえ醜い顔を更に歪ませ見るに堪えない顔に成っていた。

声は止む所か勢いを増してある程度笑った後ピシャリと止み。怒りが籠った小さく低い声が聞こえた。

「てめえは俺を怒らせた。」

と。



Side 霊使い

ビキビキ

俺は今とても機嫌が悪いんだ。主に嫉妬的な意味で。

今から始まるのは戦いじゃあねえ。

俺からのアイツに対する嫉妬100%で形成された八つ当たりだ。

だが、その八つ当たりは一方的で圧倒的なワンサイドゲームだ。

人は死ぬ時この世に未練があると、死ぬ瞬間にとっても強い感情が放出される。

そして幽霊と言うものは死ぬ瞬間の感情、乃ち思いがそのまま具現化したものなんだ。

「思いは力になる！」なんて事を誰もが一度は聞いた事があるだろう。

これが本当なのは、俺には分からないが、これが幽霊に対してならハッキリと自信を持って言える。

思いはは力となる、と。
人には様々な感情がある。
嫉妬や怒り、喜びに悲しみ。
悪意や殺意なんて物もある。

その感情が強ければ強いほど、それは強力な霊となり、周りに何らかの影響を及ぼす。

例えば自殺が多くなったり、物が勝手に動く。といった具合だ。

つまり、俺は何を言いたいのかとゆうつと…………。

「霊、乃ちそれは力そのものだ。」

「誰だ小僧。お前は何を言って——」

最後まで言わせない。

鬼の両手首から血が吹き出す。

予想外の痛みが体にはしると力が抜けるものだ。
鬼は突然走った両手首の激痛で、とっさに二人を掴んでいた手を離す。

ドサッ

「がはっ！」

「ゴホッゴホッ」

二人が地面に落ちるが……あーあー、可哀相に首に手の跡がハッキリと付いちちゃってるよ。

首だけじゃなく体中に切り傷や打ち傷があるな。嫁入り前の体だつてのに可哀相に。

まあ、でも仕返しは俺がやっておくから安心してくれ。

鬼の手首半分位まで切れているけど……硬いな、コイツ。

今俺がお前の両手首を切らせた霊は、人型で両手が鎌に成っているタイプの悪霊だ。

普通なら手首が切断されても良いほどの切れ味なんだけど……後で、もうちょっと成長させるか。

一先ずあの二人を移動させるか。

直ぐに終わるだろうけど万が一って事もあるし。

「よいしょっと」

軽い……けど二人同時は無理だな。

片方ずつ移動させるか。

え？鬼はどうしたって？アイツなら俺に手首切られて悶えてるよ。

ざまあみろ。

ま、これからもつと苦しむ事になるんだけどな。

んー、どうやって苦しめようか。

二人の目もあるし、今後のためあんまり手の内見せたくないんだよな。

しょうがない、今回は少ない霊で尚且つ最大限苦しむように殺すか。

その条件だと質よりも量で攻めた方がいいな。

うーん、何にしようか……。

そつだ！アイツらに殺らせよう！

そうすれば絶対あの鬼は苦しみながら死んで行くし。

その様を見れば俺のこの嫉妬心を鎮めてくれるだろう。

OK、殺りかたは、決まった。

精々その醜い声で絶叫と言う名の歌を聞かせてくれ。

「小僧！やりおつたなっ！！」

「あーあー、うるさい、うるさい。ちょっとは静かに喋れねーんですか？」

鬼は返事の代わりに腕を水平に横振りして来た。

俺は避けるなんて更々ないし、必要もない。

だってアイツの腕は俺に届く前に……

パチッ

止まるんだから。

俺は腕が顔に届く前に指をただ一回鳴らした。

すると、鬼の腕は俺の顔、数十センチでピタリと止まり動かなくなった。

いや、正確には動けなくなった。かな？

動けなくなったのは腕だけじゃない鬼の体全体が、だ。

きつと鬼は今、とてつもない不快感と尋常ではない寒気に襲われているだろうな。

寒気の原因言わずもがな霊だ。良く聞くだろっ？霊が出る周りの気温が下がるって。

あれは強い霊がいたり、かなりの数霊がいると尋常じゃないくら

い気温が低くなるんだ。そして、鬼が感じている不快感の原因、これも霊だ。鬼の手首を切った霊、通称鎌そのまんまと同じ悪霊の類だ。ただ鎌と違うのはソイツの形、そして……量だ。

色はまるで雪の様に白く、形は細く長い手。

そして量は、数え切れないほど。

到底数える事の出来ない腕が鬼の体中から生えて（……）いる。その手、一つ一つに掴まれる感覚はとてつもない不快感だろう。

「な、なにをした！」

鬼は俺を睨みながら、なんとか動こうともがく。

全くもって滑稽だね。

今から一体何を起こるかも知らずに。

「ウケケケケ」

2 幽霊（後書き）

やっぱり半端、何故引つ張つたし。

3 幽霊（前書き）

携帯壊れて投稿遅くなりました。

3 幽霊

グチツバキツ　グチャビチャ

「ガアアアアアアアアアアアア！」

その声は思わず耳を塞いで仕舞う程の叫び。

その光景は今まで幾度となく、化け物を殺してきた熟練者でも、おもわず目を逸らして仕舞う程の惨状。

鬼は叫ぶ事しか出来ず。

私達は目を背け。

男は楽しそうに笑っていた。

ウケケケケ

と。

▲ ▲ ▲

Side 刹那

なんだこれは！
なんだこれは！！

私には何が起こっているか分からない。

あの鬼の手首を切り、私達を助けてくれたのも、鬼の動きを止めたのも。そして今起こっているコレも。

全てこの男がやっているのか？

魔力は一般人と同等で、気なんか殆どなく、武器すら持たない。

そんな男が――

「グガア アアアアア」

また鬼の体の一部が食いちぎられた様に消える。

そして鬼は悲鳴を上げる。

もう半分は消えて無くなった。

内蔵は丸見えで両腕は最早もうない。

それに、鬼が還らずにる、これは異常だ。

普通召喚された化け物共はある程度傷を負わせれば還って行くのはず。

だが。誰がどう見ても、これはもうどうやっても助からない、と悟るだろう。

それ程の傷だ、なのに、なにに何故還らない。
おそらく後数分で鬼は消えて無くなるだろう。
血と僅かな肉片だけを残して……。

それにしても寒いな。

このままでは風邪をひいて仕舞う。
早く帰らねば。

まさかこの寒さもあの男か？

こんな事が出来るなら、気温を操作する事も出来るだろうし？

「いや、それはない……かな？」

▲ ▲ ▲

Side 真名

震えが止まらない。

なんなんだアレは。

この気持ちはきつと横に居る刹那も思っている事だろう。

鬼の両手首を切ったのは得体の知れない化け物だった。

人の形はしていたが足は無く宙に浮いていて両手は正しく鎌だった。

そして今鬼の動きを止めているのは……手。

そう手だ真つ白で長い腕。

それが鬼の体中から生えている。鬼を覆いつくす程に。この光景を見た者、誰もが最初に感じるのはきつと恐怖だろう。

そして、同い年か少し上位の年の男。

魔力は一般人のそれで杖所か武器さえ持っていない。

ほぼ確実に一般人だろう。

なのに……それなのに、その男の周りとはとつともない量の何か居る。

いや、纏っているのか？

その何かのせいで存在が薄くなっているのだろう、今はあの笑い声のお陰でシッカリと顔の輪郭や声を覚える事が出来るが、きっと明日道端であつてもあの男だと気が付く事は出来ないだろう。

あの何かを纏っていなければ別だろうが。

「ウケケケケケッケ」

笑い声がよりいっそう勢いが増す。

（次は一体何をするつもりだ。）

そう思つ時だった。

「グガアアアアアアア！」

私は自分の目を疑った。

だってそうだろう？

さつきから鬼から生えていた無数の手、その掌に口が現れたんだ。手、一本一本に。

——カチカチカチカチカチカチカチカチ……

手達は齒を鳴らす。

まるで笑う様に。

そして――

「ガアアアアアアアア！」

食べた。

いや、喰らったと言った方が良いかも知れない。

手は美味しそう鬼を喰らう。

グチャグチャと下品な音を立てながら。

「オエッ……ウツ……」

私は鬼の悲鳴とこの光景で吐きそうになるが、必至にそれを飲み込んだ。

グチャグチャ バキッグチヨ

既に内臓は丸見えで両腕もうない。

だがそれだけなら見馴れている……と、までは行かないが別に吐き気を催す程では無い。

なら何故か？それは当然あの手の性だ端から見ても嬉しそうに鬼を食べる。

カチカチと歯を鳴らしながら。

（これは堪えるな……）

刹那は大丈夫なのか？

と、私は隣を見る。

だが刹那はただ呆然としているだけだった。
まるで何が起こっているか分からない様に。

「刹那、お前は……！」

何故コレを見て平然としていられる！

私は全てを言い終える前に気が付いた。

（見えて、いないのか？）

刹那にはアレが見えていないのか？

そうか、だから平然（？）としていられる。

（魔眼……か。）

久しぶりこの眼が無ければと思ったよ。

もう鬼は死んだのだろう。

うめき声一つ挙げずピクリとも動かない。

ん、

ムズムズ、ムズムズ

「はつくちゅん！」

それにしても寒いな、この寒さは尋常じゃない。

「早く帰らねば風邪をひいてしまうな。」

▲

▲

▲

グチャグチャグチャグチャ

白く長い手、白手は美味しそうに鬼だったものを食べている。

「シツカリ残さず食べるんだぞ。」

カチカチカチカチッ

俺がそう言つと白手達は一斉に齒を鳴らして返事をした。

まったく可愛いやつめ！

あゝ、しっかし気分が良いな。

「よし、この鬼の霊をこいつらと同じ悪霊にしてやろう！」

悪霊つてのは普通の霊と違って、僅かにだけ残っているナケナシの理性さえも無くなってしまふ。

だから中位の霊をわざわざ悪霊にする、なんて勿体ない事は普段はしない。

でもほら、今俺機嫌良いし？この鬼ム力つくし。

でも悪霊にするのは悪いことばかりじゃない。

悪霊にすると、ナケナシの理性さえも無くなるけどその分力は増すし、無駄に理性があるよりよっぽど使い易くなる。

だから悪いことばかり、ってなわけでも無いんだ。ま、プラスかマイナスか、って言ったらマイナスになるんだけどね。

カチカチカチカチッ

白手の歯を鳴らす音が聞こえ、鬼の方を見ると既に鬼は僅かの肉片を残りして消え去っていた。

なんだもう食い終わったのか。

いくら毎回コイツラに死体の処理をさせているといっても、あの

巨体の鬼をものの数分で完食してしまうのは流石に思うところがあるが……まあいいや、そろそろ霊化する頃だろうし。

ただでさえ低い森の気温がガクツと下がった。

「ウゝウゝウゝアアアアーーーー!!」

「流石中級、霊圧ハンパないな。」

普通に考えれば俺みたいな一般人とほぼ変わらんスペックの人間が中級の霊を従えるなんて不可能に近い。それどころか下級ですら危ういな。

だからこれは俺の唯一才能。

俺は中級所か上級、神でさえその気になれば従わせる自信がある。

結局何を言いたいかとだ。

「中級ごとき俺の敵じゃねえんだよ!」

俺の周りに小さな蛍の光のような玉が現れる。

言霊。

言葉に宿る霊。コレを言葉に乗せて声を放つ。

——スウッ……

息を深く吸い、少し溜める。そして右手を突き出しそれを一気に小さく放つ——ただ

「来い」

と。

3 幽霊（後書き）

ヒロイン募集中。

4 幽霊（前書き）

祝！10000pv！！

キタコレ

嬉しい過ぎです。

4 幽霊

マジ、ダルメシアン。

あーあー、ねむいねむい。

決めた今日は学校をサボタージユする。

俺は昨日の様に布団の上でゴロゴロと寝返りを打つ。

つか、昨日の事絶対に学園長なり魔法先生なりに伝わってるよな
！。

バレたかな……ばれたよなあ〜。

あれだって、俺もあの時は俗に言う最高にHAI！ ってやつだ
ったんだ。

お前の意思が弱すぎるんだ！ とか言われてもなあ

しょうがないじゃん、童貞の怨み嫉みはそれ程恐ろしいもんだ
よ。

えっ？

『つかお前昨日あの後どうしたんだよ。』
だつて？

ウケケケ、知りたいのか？知りたいんだな？

チキショー！そんなに知りたいんなら教えてやるぜ！ 回想スタ
ートウ！！

「ふー、言霊乗せるまでもなかったな。」

あの鬼を従わせるのは思った以上に楽で簡単で呆気なかった。

「拍子抜け、つーか意思弱すぎだろお前。」

「ウゝアゝアアアア」

まったく、分かってんのか？コイツ。
さっきの言霊返しやがれ！

まあいいか、過ぎた事をグダグダ言ってもしょうがないし。

一息着いた所で俺はあの二人組の存在を思い出す。
あれ！？ そういえば俺今スゲーかつこよくない！？

、
絶体絶命のピンチ

×
颯爽と現れる助ける俺

、
そして伝説へ――

キ
タ
コ
レ！

イける！イけるぞこのまま上手く行けばあの二人にフラグが立ち、
そしてそのまま……！！

彼女いない歴〃年齢、のこの俺に遂に、遂に！

「我が世の春がキターー！！」

成るほど、コレがモテ期とゆうやつか。

ウケケケ、脱チエリーも遠くないな！ うむくるしゅうない。

おっといかんいかん速く話し掛けなければ……ってえっ……。

あーるえるえーおかしいなあ。

えっ？なに、居ないんだけどあの二人。

おかしいなアソコの木の幹にもたれ掛らせてた筈なのに。

見間違いかな？

ゴシゴシ

キヨロキヨロ

居ない！ やっぱり居ないよ！！

折角助けたつてのに、礼も言わず逃げるって……コレ何てクソゲ
ー？

ピンチを助けたのにフラグ所かチャンスまで無いとか。

「あ、あれ？ おかしいな目から変な汁が出てくるよ。」

成るほどコレが骨折り損のくたびれ儲けってやつか？

いや寧ろこれで俺の正体？がばれたから絶対にマイナスだな。

ちくせう。

俺の純情？をモテ遊びやがって！

もう二度と人助けなんてやらねーかなー！！

俺は涙がこぼれない上を向いて帰った。

回想終了✧

どうだった？

ほら笑えよ。

知りたかったんだろ？
感想を言って見ろよ。

ははっ、信じられるか？逃げられたんだぜ、俺。
いくら魔法関係者に嫌われてるからって、礼も言わずに逃げられ
たんだ。

しかも女の子に。

笑たいなら笑えよコンチキショー！！

もうやだ！学校行きたくない！

昨日は彼女を欲しさで出合いを求めて登校したが、出合ってもダメな時はダメ。とゆう容赦の無い現実を突き付けられた今の俺には学校が悪魔に見えるぜ。

鬱だ、ここは何とかして気分転換をしなければ……。

あ、そうだあれしよ。▲ ▲ ▲

今日、昼休みに龍宮真名は桜咲刹那と共に学園長室に訪れていた。

「ふむ、その話は本当かのう？」

学園長である近衛近右衛門は傭兵である龍宮真名と魔法生徒である桜咲刹那の話をまだ完全に信じられずにいた。

「学園長、真名の言った事は全て真実です。」

「しかしのう……。」

あやつ、紺野 柎このの まゆが、それなりに有名な魔法使いの息子じゃが魔

法の才能が全く無く、魔力も一般人と同じ程度しかない事は知っておるじやろう？」

話に上がった“彼”、紺野証はこの麻帆良の裏……魔法をしる者達に嫌われていた。

嫌われて、と言っても露骨に嫌うのではなく、彼を見ると思い出したように『出来損ないか……』や『臆病者め。』と蔑む“嫌われて”いる、だ。

嫌われる理由はいたって簡単だ、親がだれもが認める立派な魔法使い《マギステル・マギ》で彼が出来損ないだからだ。

彼は両親が立派な魔法使い《マギステル・マギ》だというのに魔力は低く一般人と同等、魔法を使う才能もゼロで一つも使えない。

彼が両親に縁を切られたのは魔法関係者ならだれもが知っている事だった。

だがきつと彼、紺野証に“そのこと”を言えばきつと笑って答えるだろう。「三流ファンタジー小説の主人公みたいだろ？」、と。

閑話休題

「それは知っています。

ですが彼は現に私達の目の前で強力な鬼を殺しました。

それが魔法意外に何があるんですか？」

刹那は昨日中級の鬼を殺したのは魔法で、彼は魔法を使える事を隠している、と思い込んでいた。

（たとえ一人だとしても、あの鬼を殺す程度の力があれば、魔法生徒として少しでもお嬢様の安全の手助けになると言うのに！）

「ふむ……先程も聞いたが確かに“殺した”のじゃな？」

学園長は再度確認する。

「はい、確かに殺しました。」

ただ、何やら得体の知れない魔法を使っただけではいいましたが。」

刹那と学園長が話している間、真名は一人考えていた。

あれをやったのは魔法なんかではなくもっと別の物だと知ってのはここでは真名しかない。

真名はそれを言うかわまいか迷っていた。

（あれは間違い無く魔法ではなかった。だがまだ不確定な事を言えば更に混乱を生むかも知れないな。）

「学園長——」

ここで真名は、あの魔法ではない何かの事は保留にし、学園長に提案した。

分からないのなら直接聞いてみればいいのでは？と。

4 幽霊（後書き）

ヒロイン、サブヒロイン、アイデア、感想、募集中です。

得に感想ホスイ……。

あんけーと

沢山の感想ありがとうございます。

たいした量も書いていないのにアンケートなんてしてしまいました。
みません。

どうしても聞きたい事があったので……。

先日オレンジさんから戴いた感想で、ガトウや真名の師匠の霊を
使役してはどうか？（省略）

と言う意見を戴いたのですが、オレンジさんの案をいただく場合
（保々確実）のアンケートです。

1 ガトウや真名の師匠を使役した場合の彼等の立位置。

？ 意思や理性が完璧にあり人間と保々同じ（でも幽霊）

？ 意思や理性は保々なく完璧に主人公の“道具”として扱う。

の二択です。

？のデメリットは作者がガトウや真名の師匠らの性格、口調を全く理解しておらず、確実にオリキャラとかす事です。

？のデメリットはガトウや真名の師匠らとの会話が全く無くなる事です。

でも師匠は真名のパパのポジション……の予定。？だったらね！

？の場合はガトウや真名の師匠の性格や口調も教えて頂けると泣いて喜びます。（作者は原作未読です。）

2 アーティファクト募集。

一応二つは決まっているんですけど。何分作者は優柔不断なので、「あつ、こっちの方が良いかも……」とコロコロ変わります。

アンケートは以上です。

感想にでも意見をくれると嬉しいです。

次話なるべく早く投稿出来るよう努力します。

5 幽霊（前書き）

アンケートで？希望が一人もいないだと……！

因みに？は弱外道ルート
は？ガチ外道ルートです。

5 幽霊

—— 負けられない、戦いがある。

—— たとえその身がちぎれようと。

—— たとえその身引き裂かれようと——

—— たとえ…… たとえ壊れ焼かれ食われ喰われ刺され打たれ殴られ蹴られ絞められ犯され斬られ削られようと……

—— 負ける事、それは死ぬ事と同義。

—— おまえら覚悟は出来たか？ この命懸けの戦いへの覚悟が

—— よろしい！ならば戦争だ！！

—— 始めるぞ！

「第2回！実体化争奪！？ 大争奪戦！！グチヨリも在るよ。 っ
の開催を宣言する！！」

「「「「ウゝアアアアアゝアゝアゝア……」」」」

「さあて！今年？も始まりました。

幽霊の幽霊による幽霊の為の大会。司会兼実況を勤めるのは、この私大会のプロデューサーでもある紺野 柁です。

今回のスローガンは『ポジティブで行こう！』です！
皆さん悔いのないように精一杯頑張ってください！」

「「「「「ウゝアゝアアアアアアア！！」「」「」「」

うーん中々ノリが良いじゃないか、でもちよつとこの部屋じゃ俺の霊全てを喚ぶのには狭かったな……反省。次に活かそう。

あーあー、第一回はよかったな、まだ霊も今ほど多くなくて、比較的大したアクシデントもなく、スムーズに事が運んだ。

でも今回は霊の数も多いし、何だか嫌な予感がする。
ならやめろよ。なんて言わないでくれよ？ こんなことでもしてないと吹っ切れないんだ。

ん？ ルールはどうなってたんだ！

だって？よしてきた！

説明しよう！

実体化争奪、大争奪戦とは、その名の通り実体化……つまりは実体を持つ強力な霊になれる可能性を秘めた霊達の命を懸けた戦いな

のだ。

ルールはいたって簡単、範囲は麻帆良全体で優勝条件は身内（柊に使役されてる者同士）だろうとそこら辺に居る浮遊霊だろうと、とにかく少しでも多くの幽霊を、俺のもとへ連れて来た者が優勝だ。ついでに優勝賞品はこの間の中級の鬼だ、コイツを喰えばぼ間違いなく強力な霊になるだろう。

ルールは理解したな？

「それじゃ始めるぞ！」

霊はシーン、と音一つ立てず静かに開始の合図を待つ。

「位置について、よい……スタート!!」

その瞬間、霊達は一瞬で居なくなっていた。

▲

▲

▲

龍宮真名は昼休みの学園長への説明の直ぐ後、学校を早退しある寮に向かっていた。

「学校を休んでいるとは思わなかったな。」

真名は一人呟く。

直接本人に聞いてみれば？ と、進言した真名だったが、まさか自分が聞きに行かせられるとは全く思っていなかった。

最初は桎が通っている学校に電話で聞く筈だった。

だが、桎が学校を休んでいると知ると学園長は真名と刹那に今から直接聞きに行つて確認してくれと。

二人は当然断つた、その時はまだ昼休みであり、授業もまだ残つており刹那にいたつてはお嬢様、近衛木乃香の護衛と言つ任務がある。

結局は真名は多少なりとも金は出す。と言われ学園長の申し出を受ける事に成つたのだ。

（いくら学園長公認の早退だとしても、勉学は余り疎かにしたくは無いな。）

真名は高等部男子寮を見上げる。

桎はこの寮の一人部屋だ。

普通は二人で一部屋だが桎は長谷川千雨と同じ様に一人部屋だ。理由はきつと“一応”魔法関係者であることと魔法関係者に嫌われているからだろ。と真名は考える。

魔法関係者は魔法関係者と同室になる。

これはほぼ常識となつている事だ同居人が魔法関係者であるのと

ないのでは大分面倒事が違う。

相手が魔法を知っていれば、夜何かがあり呼び出されても一々説明をしなくてもいい。

だが逆に魔法を知らない一般人の場合はそうは行かない、毎回その度に相手が怪しまないよう納得する理由を考えなくてはいけないからだ。

それらを考えると“一応”魔法関係者だが同業者に嫌われていて同居人が見つからない。

そして部屋が一つ空いていた事もあってか一人部屋になったのだ。

普通はここで誰も同室になりたくない程嫌われている。

とゆう事を再認識し悲しむのだが、柩は「一人部屋だああああ！イヤッホイイイイイイ！」と喜んでいた事はまた別の話だ。

真名は紙に書かれた番号の部屋の前に立ち、ゆつくりと息を整え、チャイムを鳴らした。

時刻は丁度1時半だった。

▲ ▲ ▲

S i d e
柩

うあー、暇だー。

あーあー、前回もそうだったんだよなー。

ハッキリ行つて時間制限の2時までやることが無いんだよな、この大会。

え？ 実況はどうしたつて？

おいおい、あちこちに何百もいる霊を実況でどんなムリゲー？
あんなもんその場のノリだよノ・リ。

今回は誰が優勝かなー。

俺の予想ではテケテケかあの怨霊だな。

怨霊つてのは悪霊よりも性が悪い。

人は目には見えないが空気中に霊気を放っている。 喜び、悲しみ、憎しみといった感情が高ぶった時は特にな。

そしてそれが集合体になつて怨霊となる。

だが、稀に憎しみ、嫉妬、怒りといった負の感情だけで形成された怨霊が生まれる。

これは本当に稀にだがそいつは文字通り半端じゃない力を持ついる。

それも一般でも有名で知名度があるテケテケとタメを張れる程にな。

俺も最初はあの姿。

全身が真っ黒で身長１メートル程の、足より腕が長く顔は耳と裂けた様な大きな口しかない姿に騙された。

ま、あの靈気を感じて直ぐに考えを改めたがな。

ふわぁーあ

俺は欠伸をしながら又してもゴロゴロとベットの上を転がり回る。

丁度後３０分か、この３０分をどうやってつぶそう……

どうやってこの３０分を潰そうかと考えていると部屋のチャイムが鳴った。

ピンポン

ん、こんな時間に誰だ、一体。俺は休んでいるから部屋にいるが、普段は留守の時間帯だぞ？

普通なら力一杯怪しむ所なのだが、暇を持て余していた俺はあまり深く考えず玄関まで行き無防備にドアを開けた。

するとソコにいたのは昨日俺が鬼から助けてやった二人組の片割れだった。

………つて！。　　まてまて！緊急事態発生だ！！　　ハ―リー！ハ―リー！！！！

どうしよう、そういえばあの二人組に逃げられた事で頭が一杯で、バレたトキの対処を全く考えていなかった！！

だがその慌てた心情を顔に出さないのが柎クオリティ。

このままシラを切りとうしてやんよ！！

「やあ、こんにちは君が紺野　柎だな。

昨日は助けて貰ったにもかかわらず礼も言わず帰ってしまいすまなかつ………」

「人違いです。」

――ボタン

ふうー、これでなんとかこの場はやり過ごせたぞ。
でもあの子とはお近ずきになりたいな……！

そうだ！ 俺はあの子を助けたんだ！ そしてさっきは俺にお礼
言っていた。

と、いうことは！

ふむ、脈ありか……あ”！

ヤバイ。

非常にヤバイ。もし俺がここでこのままシラを切ったら、俺が彼女
達を助けたという事実も無かった事になるということに気がついた。

それは嫌だ！ 折角のフラグチャンスを台なしにするなんて！

クソッ！ 俺はどうしたらいいんだっ！！

こうなったら！ ままよ！！

ガチャ――

「あ、やっぱりそれ俺です。」

6 幽霊（前書き）

アンケート、ご協力ありがとうございました。

？が圧倒的に多かった……。

と言うことで？で行きたいと思います。

他にも色々なご意見ありがとうございました。

是非参考にさせていただきます。

それと作者は、優柔不断の気分屋で行き当たりばったりなので、意見がコロコロと変わりますのでご注意ください。

例、「これは無理ですねー」↓「やっぱり良いかも……。」

みたいな？

それにしても、試験勉強にレポートにバイト……。

更新速度、あげたいなあ……

6 幽霊

やあ、柁だ。

俺は今さつき尋ねて来たあの子に出すためのお茶の用意をしている。

コポコポコポ

カチャ

俺はテーブルの上の二つの湯呑みにお茶を煎れ、片方をあの子の前に置く。

「どうぞ」

「いただきます。」

俺はあの子がお茶を飲むのを確認してから自分もズズツとお茶を飲む。

口の中に広がる程よい苦味とお茶のいい香、熱いお茶のため少しずつ飲み込む。

一口目を飲み終わると同時に自然と深く息を吸ってしまう。

「スウー、はあー」

そしてゆっくりと息を吐く。

毎回これを味わう度に、生きていて良かったと実感をする事が出来る。

はあ、今日もお茶が美味い。

何んだろ、毎回お茶を飲む度に、まるで心が洗い流された様に綺麗になったような気がする。

ん？ そう言われると何だか俺の心がいつも汚れているように聞こえるな。

HAHAHAそんな訳有るわけないか。きっとこれは……そう！言葉のあやって奴だ、そうに違いない。

よし。

それを証明するためにも俺は今日からYES Manとなるっじゃないか。

例えばどんな事を聞かれようと決して嘘はつかないぞ！

何たって俺はYES Manだからな。

▲

▲

▲

「柎さんはお茶が好きなのかい？」

「そうだねお茶は好きだ。あな……えーと。」

「おっと、そういえば自己紹介がまだだったね。」

私の名前は龍宮真名だ。好きに呼んでくれ。

「

「んー。じゃあ龍宮さんで。」

ついでにお茶は好きと言うよりも大好きだ、愛してる。

お茶とは日本の国宝だっ！！」

急に立ち上がり叫び出した柁に真名が少し引いている事を本人は気が付いていない。

「……えーと、私がここに来た理由なんだが……分かってるかい？」

「それは俺に礼を言う為だろ？」

「えっ？」

「えっ？」

柁の当然だろ？ と、でも言いたげな自信満々のその答えに真名は思わず聞き返してしまった。

（昨日の事を聞きに来るとは思わなかったのか？）

「……あつ、いや、そのとうり何だが私はあなたに聞きたい事もあるってね……。教えてくれると嬉しいんだが。」

真名は引き攣った笑顔を柁に向けながら言う。

勿論、**YES Man**と化しているので肯定した。

「いいよなんでも聞くといい。」

「だけどその前に俺は君に聞きたい事が有るんだけど……いいよね？」

だが柁には真名よりも先にきいておかなければならない事があった。

先程までニコニコとしていた柊の雰囲気ガラリと変わる。

現在もニコニコとした笑顔は崩れていないが明かに違う。窓も開けていないのに気温はガクツと下がり、何やらただならぬ威圧感を部屋全体から感じる。

真名はその威圧感を感じると同時に素早く身構え、魔眼を発動させ……言葉を失った。

部屋にを埋め尽くすのは……

[illegible]

霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊霊……。

数え切れない程の霊だった。

化け物の様な姿の者から、普通の人の霊まで、全てが真名を見ていた。

まるで品定めでもするように。

（これはヤバいな。）

真名はこの時柩に周りに居る人の幽霊をみて《この得体の知れない何か》が、幽霊と言うことに気が付いた。

「ん？ どうしたんだい、龍宮さん、急に身構えて。」

「……………」。

上っ面だけの笑みを浮かべた柩の言葉に、白々しいと思いつつ真名は無言を選んだ。

その無言に柩はニヤツと笑い

「へえ……やっぱり見えるんだ。」

昨日の時から、もしかしてと思ってたんだけどね。

大丈夫、今は（・・・）何もしないよ。」

「……それで、柫さんは何を聞きたいんだい？」

真名は柫の言葉を見殺しして話を先に進めた。

「いやいや、話が早くて助かるよ。」

なに、聞きたいことは簡単だ……龍宮さんは学園長や他の魔法関係者達に、自分が見た物を伝えたかどうかだ。」

柫がそれを聞くのは当然だろう、真名がそれを伝えたとなると、ほぼ間違いなく学園長なり偉い人なりの聴取を受けるからだ。

今まで見つからずにいた【この力】を知られる。

それも、あの二人が例え傷を負っていたとしても、倒すことが出来なかった鬼を楽々としかも【殺す】程の力だ。

例え魔法を使えなかったとしても、間違いなく麻帆良学園の警備への強力を求められるだろう。それに、今の今まで散々蔑まれて来たというのに、戦力になると知るや否や「警備を手伝ってくれ」、なんて言われても、誰が手伝うものか。

だが、その警備への協力を断れば、更に魔法関係者に嫌われることになる。

それらの事も加え、今後の事を考えなければならなかったので、
柁はまずそれを聞いたのだった。

もつとも、柁は今更もう魔法関係者共に何を言われようが何も感じ無いし、勿論警備も断るだろう。
よつぱどの好条件でないかぎりは。

「……伝えてはいない。」

真名はここで何か嘘について、あの霊達に殺されてしまったら、
本当に洒落にならないので、柁の問いに正直に答えた。

柁はその事を見越し、真名の言葉を信じ、一先ず安心した。

「へえ、どうして言わなかったの？」

「不確定な事を言って、混乱するのを避けたかったからね。（それに学園長達が信じるかも分からないし、下手をして他の魔法関係者の耳に入り「立派な魔法使い《マギステル・マギ》の息子の癖に、霊なんて物を使うなんて！」と、でも言いだし兼ねないからね。）」

真名は霊という単語で、同じクラスの相坂さよを思い浮かべたが、
直ぐに考えるのを止めた

（いや、あの子は柁さんとは関係ないだろう。）

「うんうん、いい判断だったね。」

もういいよ。

龍宮さんは何が聞きたいの？」

柁は機嫌が良さそうに、満足とでもいいいたげに、頷きながら霊を下がらせ、真名は霊達が、壁や床へと消えて行ったのを見て、一安心した。

「いや、私の聞きたかったのは、あの鬼を殺した《アレ》はなんだったのか、って事だったんだが……。」

柁さんは、魔法を何か使えるのかい？」

「いや、残念ながら初心者の魔法《火よ灯れ》すら使えないよ。」

ケラケラと笑いながら言う柁に真名は少しうろたえてしまった。

（魔法の才能が無いとは聞いていたが、まさか一つも魔法を使えないとわね……。）

「龍宮さん、今俺に同情したでしょ？」

真名は柁の言葉に凶星を突かれ、ドキリとした。

「いや、別に良いんだ。」

確かに一々同情されるのは、嫌だしムカつくけど……。」

柁はそこで一旦言葉を切り、満面の笑みで真名に言った

「多分そのうち、その時の同情を返してほしい程、俺を殺したい位嫌いになると思うから。」

6 幽霊（後書き）

作者は優柔不断。

大事な事なので2回書きました。

7 幽霊（前書き）

9 5 / 1 2 9 P / V

1 7 / 7 1 9 ユニーク

4 5 4 お気に入り

1 1 8 9 p t 総合評価

嬉しい過ぎます。

これからもがんばります。

上とは別に、

なんだか、書くたびに小説のクオリティーが落ちている様な気がする作者です。

勘違いであって欲しい！（切実）

さらに別に、

作者がたまに書く他の小説は見なくいいです。

いつの間にあって気が付くと消えてる様な小説です。

何故かああゆうのを書くとこちらが進む。

7 幽霊

霊使い、紺野 柁は同情を嫌う。

同情とは、時にその者を慰め、時にその者の心を軽くし、時にその者を蔑み、時にその者を見下す。

物事は人によってとらえ方が変わってくる。

前者のように、同情から自分を気遣う気持ちを感じる者もいれば、後者の様に自分を侮辱していると、感じる者もいる。

同情した本人が実際どう思ったかは、あまり問題では無い。

言葉なんて相手に伝えてなんぼ。

例え全く違う意味で捉えられ、勘違いされようとシツカリと伝えられなかった自分が悪い。

それが柁の考えだ。

そして、柁にとって同情や慰めなど、自分を蔑み見下しているようにしか、思えなかった。

▲ ▲ ▲

「ねえ龍宮さん、守護霊って知ってる？」

柩はに意味ありげな言葉を言ったあと、真名がその言葉の深意を問う前にまるでごまかすかのように聞いた。

「守護霊ってのは、文字通りその人を守護する霊なんだ。

殆どは親とかお爺さんとか遠い親族がその人、或はその家を守りたいと強く思っている者が成るんだけど。

その中にもシツカリとしたルールが在るらしくてね、そのルールってのがまた厄介なんだ。

【決して、自分が守護をしている人物に、自分が守護霊だと気が付かれてはいけない。】、これが守護霊達のルールらしいんだ。

もし見つかってしまったら、その場でバイバイなんだってさ、酷いと思わない？

だってもしもさっき言った様に、その人を守りたい、と思って守護霊になった霊は、自分が一番が気が付いて欲しい人に気が付いて貰えなくなるんだ。

でも他に方法がない訳じゃないんだ、その人に会いたければ守護霊を他の霊に譲り守護霊を辞めればいい。

もつとも、自分が信用出来る霊を見つけれただけだね。

ただ、そのときは、日にちがたつにつれ段々と理性が失われて行き、最終的には悪霊か地縛霊に成るんだけどね。

まあ、俺にとっては悪霊だろうが地縛霊だろうが霊は皆等しく道具なんだ。」

だから――

そういつて柩は、一旦このマシンガントークを切り、まるで悪戯をしようとしている子供の様な笑みを浮かべ――

「合わせてやるよ。」

――来い

そう柩が真名の後ろに手を招く。

「…………っ!」

その瞬間フツ、と真名は背中から、何かが降りた様な感覚がする。

真名は直ぐさま振り向きこの感覚の正体を明らかにしようとするが、後ろには何も無かった。

真名は一安心すると同時に、柁は何をしたのか聞いたたそうとして、前を向いた。

だが、そこには……

「し、師匠？」

▲ ▲ ▲

場所は学園長室

時は午後2時10分

「しずな君！今すぐタカミチ君を此処へ呼ぶんじゃ！！」

学園長である近衛近右衛門は焦っていた。

（何故じゃ真名君。どうして柁君を殺そう等と！）

時は本の少し前に遡る。

「学園長、失礼します。

何やら早急に学園長に代わるよう電話が。」

「ふむ、いったい誰じゃ？」

「龍宮真名からのようなんですが……」

近衛近右衛門は真名からの連絡を待っていた。

連絡の内容は言わずもがな紺野柁についてだ。

魔法が使えない筈の紺野柁が魔法を使い、あろうことか刹那と真名、二人が苦戦した鬼に楽々と、しかも《殺した》事の真相について。

やっとかと近衛近右衛門は息をつく。

（これで一つ肩の荷が降りたかのう。

まったく、来年にはネギ君も来るとゆうのに……）

だが近衛右近衛門の不幸は此処から始まるのだった……。

「もしもし、今代わった。

学園長じゃ、して真名君証はどうじゃったか？」

近衛右近衛門は電話の相手を龍宮真名と疑わずに話し掛けた。

だが返って来る声は……

——ウケケケケ

笑っていた。

「……………っ!!」

返って来た声は龍宮真名などではなく、全く別の男の笑い声だった。

その笑い声は、不気味で無邪気な笑い声で、近衛右近衛門は一瞬言葉を失ったが、流石長生きしているだけあるのか、すぐに立て直し直ぐさま電話の向こう側にいる者にもう一度話し掛ける。

「おぬしは紺野証君かの？」

真名君は一体どうしたんじゃ。」

それは少しの警戒を含んだ声。

柁笑いを止め、学園長の問いに答えた。

「そうですよ。」

俺は（魔法関係者）みんなの嫌われ者、紺野柁ですよー。

真名？ああ、龍宮さんの事か。

彼女なら今俺の足の下にいますよ。

学園長に電話をしたのは他ではない、彼女の事なんですよ。」

その返答に近衛右近衛門は驚く。

（足の下とはどうゆう事じゃ！ まさか戦闘があつたのか！？ だ
が何故戦闘なぞ。）

「あー、もう気が付いていると思いますけど、真名さんと殺し会い
しました。

いきなり龍宮さんが銃攻撃してきたんですよ。

それでこれは学園長が指示したのかな？と思ひまして、確認を取
ろうと思った次第です。

んで、どうなんですか？ なんで俺を殺そうとしたんですか？学園

長。」

「待て、待つんじゃ、柁君儼は何も指示などしておらん。ただ昨日の事について聞きに行く様に言っただけじゃ。」

それに真名君が柁君を殺そうとしたなど何かの間違いじゃ。」

近衛右近衛門は少し焦っているように返答したが実はそれ程焦ってはいなかった。

せめて、運が良ければ謝ってすみ、悪ければなんらか賠償を求められる程度だろう、としか考えていなかった。

だが、柁の返答はそのどちらでもなく、近衛右近衛門がまったくの予想外の答えだった。

「あ、そうですかすみませんね、変な疑い掛けちゃって。」

ついで言うつ、龍宮真名は俺を殺そうとした。

これは変わりようのない事実です。

では……」

全くもって予想外。

柁は賠償どころか、謝罪すら求めなかった。

ただただ、事務的な受け答えで、学園長である近衛右近衛右が指示したのではない、とゆう事を疑いもせず信じ、あるうことか「話はこちらで終わりです。」とでも言わんばかりに、そのまま電話を切ろうとした。

「待つんじゃ柁君！今回の件は本当にスマンかった。
じゃから……」

近衛近右衛門は何やら嫌な予感がし、急いで柁を電話に引き止め謝罪をした。

そして、「真名君を許してやってくれ。」そう言おうとし……柁に言葉を被せられた。

「なにを言っているんですか学園長。」

あなたが指示をしていないのなら、今回の件は俺と龍宮さんとの問題ですよ？

悪いのは龍宮さんで学園長は、全く何一つ欠けらも悪くない。」

だから

「敗者である龍宮真名をどうしようが、俺の勝手って訳なんですよ。」

近衛近右衛門は言葉を失う。

「一体真名君に何を……」

そしてまた柁は学園長が全て言い切る前に言葉を被せた。

「一体龍宮さんに何をするか……ですか。

なに、簡単ですよ。

殺します。」

「ひょ！」

当然近衛近右門は驚く、まさか例え自分を殺そうとした者といえど、自分より年下何よりも女の子を殺そうなどと考えるとは、露にも思わなかったからだ。

そんな学園長の気持ちを知ってか知らずか、柁は留めの一撃を放った。

「龍宮さんは、俺を本気で殺しに来ました。だから殺しますいいですか？ いいですね。

では。」

「駄目じゃ、待つんじゃ！今そちらにタカミチ君を行かせ……」

「答えは聞いてません。」
ガチャ

ツーツー

回想終了。

（タカミチ君、頼んじゃぞ。）

▲
▲
▲

S i d e
龍宮真名

師匠がいた。

振り返ると、そこには師匠がいた。

私の師匠、数年前に死んだ筈の師匠。

数年振りに見るその姿に私は思わず涙を流した。

先程まで柁さんが話していた内容が真実だとすると、師匠は数年前から私を護っていてくれた事になる。

嬉しい自然と涙がこぼれる。

『私の戦場に男は要らない』そんな事を言っていたあの時の自分が嘘のようだ。

「ま……ナ……………」

師匠が私の名前を呼び、それに答える代わりに抱き着こうとして

……

「マ”ナ”ア！」

ガタン！

私が師匠に抱き着く事は叶わなかった。

抱き着こうとした勢いで盛大に転ぶ私。

そして声が聞こえた。

「さあ、第二回、実体化争奪！？大争奪戦の栄光を手にしたのは！

怨霊とテケテケのツートップだー！！」

『『『『『ヴア”アアアアアアア』』』』』

いつの間にかにまたもや柁さんの部屋は霊で埋め尽くされていて、
師匠の目は何処か虚だった。

「本来ならば、此処で両者に優勝を巡って争って貰うのだが、なんと！」

今回は特別！

今さっきもう一つ優勝賞品が、手に入ったため、今回だけは例外としてツートップ、つまりは同時優勝を認めたいと思います！！」

そう言った柁さんの声は、とても楽しそうで元気だったが、私は見てしまった。

まるで死人の様に無表情な柁さんの顔を――

7 幽霊（後書き）

作者は優柔不断でいきあたりばったり！

感想や意見、アドバイス待ってます。

8 幽霊（前書き）

遅くなりましたーごめんなさい。

今回は駄文も駄文、大駄文です。

注意してね！！

別件

アーティファクト募集したけど、それ以前に「アーティファクト
いらなくね？」や「霊使いを極めようぜ！」等の意見がちらほらあ
ったので、改めて聞きます。

アーティファクトいますか？

YES or NO

8 幽霊

Side 柩

おはよう、柩だ。

時間的にはもう、こんにちわ何だが「こんばんわ」とか「こんにちわ」は、ちょっとよそよそしく感じだろ？

だから俺はいつでもおはようなのだ。

ただし、親しいものに限るけどな！（キリッ

はい、そこおー！

「オマエに親しい奴何かいるの？」とか言わなあーい！

俺が嫌われてんの魔法関係者だけだから！ 普通に学校では友達とかいるから！

そこんとこ勘違いしないよーに！

俺ってばスゲー頭いいんだぜ？

まあ、そんなどうでもいい事は置いて、今は楽しもうじゃな

いか。

この龍宮真名さんの絶望して怒り狂った顔を――

▲
▲
▲

俺は考えたんだ。

俺を傷付けてもいいのは、俺が傷付けた奴だけだって。

俺は思ったんだ。

俺を殴ってもいいのは俺が殴った奴だけだって。

俺から殴った時は、殴られた奴は殴り返してもいい。

まあ、だからといって、殴らせてやるかどうかは、また別の話だな。

よくある「・・・の代わりに殴る！」や「・・・の復讐。」なんて物は俺は認めない。

俺を殴る権利が在るのは、俺に殴られた奴だけ、だ。

代わりに……なんて事は絶対にありえない。

そして絶対に許さない。

要するに、俺が何を言いたいか、と言うと。

俺を殺していいのは、俺が殺した奴だけだって事だ。

もし、俺を殺そうとするなら、俺も殺そうとする。

もし、俺を殴ろうとするなら、俺も殴ろうとする。

例えそれで、俺が相手の拳を避け、俺が最初に相手を殴っても、それは相手が俺を殴る権利には成りえない。

殴ろうとした時点で、殴った事とたいして変わらない。

殺そうとした時点で殺した事とたいして変わらない。

殺られる前に殺る、そんな事は常識だ。

誰がわざわざ殺されてやるものか。

よって龍宮真名、例えばアレがオマエにとって特別な物だったとして。

俺がアレ霊共に喰わせたとしても、オマエには俺を殺す権利など無い。

なのに……それなのにオマエは俺を殺そうとしたな？ 俺の命を奪おうとしたな？

それならば――

「お前は俺に殺されても文句は言えない。」

それは俺を殺そうとしたお前がのが悪いからだ。

だから例え、俺がお前の腕を切り落とそうと、その目をえぐり出そうと、殺そうと……

『俺は悪くない』」

、
ってゆーかー、そもそも幽霊殺しても法律上、殺人なんかになんねーんじゃね？

傍から見りゃー、龍宮真名がいきなり俺を殺そうとしたようにしか見えないんだよねー。

だから俺が龍宮真名を殺しても正当防衛が成り立つし。

仮に死ななかったとしても、事情を聞くと幽霊幽霊言いだしキチガイ認定だ。

あ！ただし一般人に限るよ！！

魔法関係者普通に信じるだろうし。

魔法関係者のおおっぴらにはしない……というよりも出来ない、

だからとにかく俺を罰する事は出来ないだろう。

俺から仕掛けたならまだしも、すくなくと今回は、あちらから仕掛けてきたんだ、例え龍宮真名がどうなろうと文句は言えない。

龍宮真名の元守護霊を、目の前で喰わせたのが悪いんじゃないか、って？

ウケケケ、嬉しい事に何処の国の法律にも『幽霊を幽霊に食べさせちゃいけない。』なんて法律はないんだよ。

立派な魔法使い《マギステル・マギ》の皆様方は、そんな物は屁理屈だ！

とかうるせえーだろうけど、大体魔法がばれたら記憶消すのは（危険に巻き込まれない為だから）いいけど、何か都合が悪くなったら直ぐに記憶を消すのはどうかと思うぞ。

たまに在るんだが、魔法使いは知っての通り一般人よりも優れている。

魔法を使えば証拠も残さず人を殺せるし、盗みだって出来る。

魔法使い全部が全部、立派な魔法使い《マギステル・マギ》を目指している訳じゃない。

口では立派な魔法使い《マギステル・マギ》を目指している、と言っているけど、口に出さないだけで、実はそんなの目指していない奴だっている。

するとどうなる？

当然ソイツは魔法を悪用する。

何か理由があつたのかも知れないが、そんなのは関係ないしどうでもいい。

大事なものは何をしたかだ。

さらに手に負えないのは、その魔法を悪用した魔法使いが捕まっても、同じ魔法使いがソイツを庇って罪を軽くする、って事だ。

都合が悪くなれば記憶消しコチラに都合が良いよう改竄にする。

勿論メディアにも圧力を掛け、犯人情報が出ない様にし、晴れてその魔法使いは軽い刑ですむ。

軽い刑と言つても、オコジヨになつたりするから、軽いとは一概には言えないかも知れないが、普通の無期懲役や死刑に比べたら軽いことこの上ないだろう。

ん、そつだ一応、学園長様にもこのこと）・・・・）を報告しておこうか……

ウケケケ、さあどうやってからかってやるのかな――

・ ・ ・ ・ ・

「――!」

「答えは聞いてません。」

ガチャ

ツーツーツー

駄目だ、

全く俺としたことが、学園長に在らぬ疑いを掛けてしまった。

最初は少しかからおうかな、とも思ってたんだが、もしかしたら、実は俺が挑発？したからじゃなくて、最初から俺は殺される予定だったのか？とか考え出してしまった。

普通になら有り得ないんだけど、魔法関係者の非常識さと、俺の嫌われっぷりを見ると、もしかして……と思っちゃったんだ。

今度学園長には謝っておかないと……いや、もう謝ったからやっぱりいいや。

あーあー、それにしても困ったなー、折角好みの女の子だったのに、殺さなくちゃいけないんだもんなー。

まったく、あんな挑発に乗る龍宮さんが悪い。

龍宮さんが俺を攻撃しなきゃ、仲良く出来たかも知れないのに……。

「はあああああああああ………」

ため息もついちゃうよ、折角、のこのまま行けば付き合えるかも知れない女の子、が一人消えたんだ。

例えここで俺が龍宮さんを許して見逃しても、絶対に今後も龍宮さんは俺を怨むだろうし、もしかしたらまた殺しに来るかも知れない。

いや、それだけならばまだいい（よくはないが）、困るのは龍宮さんが俺の悪い噂を流すかも知れない事だ！！

この制服はきつと、例のあの、可愛いAランクの女の子だけで形成されたクラスが在る女子中学の制服だ（うるおばえだが）。

もしかしたら、いつか俺とそのクラスの女の子が接点を持つかも知れない、そしてそこに、龍宮さんからの俺の悪い噂を耳にする。
いこーる

—— B A D E N D

さらば脱チエリー。

おk、よし殺ろうか。

何人にも俺の恋路の邪魔はさせん！！

まあ、脱チエリーだけならばこの場で龍宮さんを犯せば良いだけ
なのだが生憎俺はピュアボーイなのだ。

レイプ駄目、絶対。

そもそも、そんな事したら俺はあのデ不細工と同類じゃあないか！
そんなのは耐えられん！！

ってなわけで俺はそんな事は絶対にしない。

何だが学園長が誰かを行かせる、みたいな事も言ってたし邪魔さ
れない内にサッサと殺ってしまおう。

まったく、学園長も余計な事を。 学園長が仕向けたのでは無い
なら学園長は全く関係ないと言うのに。

とは言つもののさっきの電話、俺から切ったんだよね……。

駄目だ！ネガティブは止めるんだ！！

「もういいや、サッサと殺って寝よう。」

うん、嫌な事があつたら寝るに限るね！

俺、この頃睡眠時間は平均4時間だし！

ビクッ

お、龍宮さんが俺の言葉に反応した。

なんだ意識在るのか。

ん、そうだ！！

どうせ死ぬなら（殺すなら）、その前にちよつとだけ龍宮さんをはからかって、楽しませて貰おう。

ほら、俺さつき学園長を疑ってしまつて、からかえなかつたから……ね？

さて、どうやってからかってやるのかな」

▲ ▲ ▲

Side 龍宮真名

気が付いたら、私は紺野証に向かって銃を放っていた。

師匠は死んだ。

それはもう理解していたし、心の整理などつくの昔に終えていた。

しかしそれは、思い込みだったようだ。

二度とは会えないと思っていた。

死んでしまった師匠。

例えそれが幽霊だとしても、今までずっと守護霊として、私を守っていてくれたのだと。

そんな事を考えていると、いつの間にか自然と目から涙がこぼれ落ちて来た。

私はそんな涙の事も気にせず、師匠に抱き着こうとした。

ガッソッ

だが、師匠はいま幽霊だと言うことを忘れており、額を床にぶつけた。

とても痛かったが自然と笑みがこぼれた。

師匠が此処に居るのだと……例え幽霊になったとしても、これからは一緒に居ることが出来るのだと。

私はまだまだ師匠に教えて欲しい事があった。

毎日毎日、師匠と技術を学び長ら過ごす日々。

楽しく笑い合っ
て過ぐす日々。

そんな、現実に有り得る未来を想像し、アレをしよう。コレをしよう。

そんな事を考えていた。

証さんが何かを大声で言っているが全く頭に入らない。

今私の頭の中に在るのは輝かしい未来だった。

そしてその、夢希望を心の内に抱き振り返った瞬間……

それは木っ端みじんに砕かれた――

目に映ったのは、小さく真っ黒い人の形をした『何か』が、私の師匠を食べてる光景だった。

（『それ』も霊なのか？それにしてもなんてまがまがしい。）

私は目の前の光景をみて、その光景について考えるのを、一瞬止めた。

なんて事はない。

所謂、現実逃避とゆうやつだ。

（やめろ。現実を見る龍宮真名！！）

私は自分自身に強く言い聞かた。

逃げるなど。

逃避はやめた。

現実を受け入れようと、閉じていた目をユックリと開いた。

そして現実を受け入れた。

何故？ どうして？

どうして師匠が柁さんの霊共に食べられている？

柁さんは、私を師匠を合わせてくれたのでは無いのか？

「ウケケケケケ」

その声には私はバツ、と柁さんがいる方に顔を向ける。

柁さんは笑っていた。

戸惑い絶望する私を見て。

——パンッ

気が付けば私は引きがねを引いていた。

8 幽霊（後書き）

作者は優柔不断で心配性。

だからアンケートとが非常に多いですが、よろしく願います。

因みに、今作者は書き方で悩んでいます。

感想、アドバイス、意見待ってます。

9 幽霊（前書き）

遅くなってすみません。

テスト、レポート、バイトが重なっており次も少し遅れるかもです。

しかも合間合間にチヨクチヨク書いていたので文がおかしくなっているかも……御容赦下さい。

あ、あとプチアンケートは無しの方で決定したいと思います。

これからもプチアンケートはチヨイチヨイあると思いますよろしくお願いします。

最後に一言

真名よ、何故こうなった（汗）

9 幽霊

「ねえ、龍宮さん。」

死ぬのは怖い？」

それは愚問、既に死を覚悟した龍宮真名にとっては無視出来るはずの言葉だった。

自分にとって、父であり、兄であった、龍宮真名の師匠。

彼女にとって、例えその師匠を幽霊だとしても、殺した桩に復讐をしようとして、殺されるなら後悔はなかった。

いや、後悔はなかった“はず”だった。

「……………っ！..」

真名は遂に柩のその問に答える事が出来なかった。

真名は柩のその言葉に期待したのだ。『もしかしたら許してくれるのではないか?』『実は師匠をまた私の守護霊に戻してくれるのではないか?』と。

別にそれは間違っではない。誰だって死ぬことは怖いし、少しでも明るい未来を信じたいくなる。

特に死ぬに関しては、例え愛する家族の為であっても、唯一無二の親友の為であっても。だ。

故に、その可能性にしがみつく事は決しておかしい事ではない。

現に今回は、その可能性に巡り会えたのだから。

「もうこの人（霊）半分食べられちゃったけどさあ、実は今ならまだ間に合うんだよね。」

正しく『バツ!』と、真名は自分の背中を踏み付けている柩を見た。

「それは……本当なのか……?」

真名はまるで氷に包まれ、霜焼けでもしそうな、酷い冷たさにも耐えながら恐る恐る聞いた。

「うん、勿論本当だよ。」

今ならまだ、他の霊をソレに喰わせれば、失った半分の体を補うことができる。

「ただし……」

そこで真名は気が付いた。

杵が楽しそうに愉しそうに楽しそうに、薄ら笑っていることに。

「——その時は龍宮さんに、代わりに死んで貰うけどね。」

▲ ▲ ▲

S i d e 龍宮真名

究極の選択。

それは正にこのことなのかも知れない。

自分の命か師匠の存在。

私は師匠の為なら死んでも構わない。

例えソレが幽霊だったとしても、師匠の敵討ちで死ぬのなら構わないと思っていた――

なのに……それなのに……どうしてっ!!

言えない。

たった一言、『師匠を助けてくれ。私はどうなっても構わない』
それが言えない。

唇が震えて口が言うことをきかない。

（言え！言うんだ龍宮真名！！）

「……………っ!」

そう自分に言い聞かせたが、遂に私は、紺野 証の言葉に答える事が出来なかった――

▲ ▲ ▲

S i d e 紺野 証

んー、結局何も答えなかったなー。

せつかく人が、両方を霊の餌にしようとしているのを、わざわざ片方だけにしようって言つのに……。

え？なら両方餌にするのをやめろって？

いやいや、それをしてたら面白くないじゃないか！

ああと、それに怨霊の黒太（いま命名）が可哀相じゃないか。

せっかくテケテケと同じ44匹も霊を集めたのに！

やっぱり、報酬はシッカリと与えないとね。

全部合計で400匹位は集まったかな？

うん。

全く効率が悪いな……戦場とかに行けば、すんごい集まるんだろ
うけど……

やっぱり、一度で良いから、あの大英雄ナギ・スプリングフィールドが、戦った魔法世界の戦争跡地に行ってみたいよね！！

よし、機会があつたら行ってみよう！

ってゆうか結局、龍宮さんは答えないのかな？

あ！ そつか！

そういえば、龍宮さんが生き残った時の、待遇や扱いをまだ言っていないね。

成る程、だから答えを決めかねていたのか。

そりゃあ聞いときたいよね！

「そうそう安心して、もし龍宮さんが生き残っても、ペット程度の扱いは補償するよ。」

「ペッ……………ト？」

真名の顔が更に絶望に染まる。

おいおい、そんな嬉しそうな顔すんなよな。

全く、可愛いじゃないか。

でもそろそろ待つのも飽きて来たな、そろそろ決めさせるか……。

「さて、龍宮さん。もう一度だけ聞くよ？」

自分かコイツ、どっちを選ぶの？

「わ、私は——」

真名は柩の、有無を言わせぬような感情の無い声を聞き、次は無
いことを悟ったのか、まだ考えすら纏まっただていない頭で急ぎ答え
ようとした時だった……

バンッ！

「真名君！」

その声は、ドアを壁に叩き付ける轟音と共にハッキリと二人の耳
に届いた――

柩の顔が露骨に歪み、それに対して真名の顔はわかりやすく綻ん
だ。

助かったと――

・ ・ ・ ・

その声の主、高畑・T・タカミチは一先ず安心した。だがそれと同時に、タカミチは一体、龍宮真名何が起こっているのかを理解出来ていなかった。

その連絡（念話）は唐突。

タカミチは授業中にも関わらず、その時間を自習にしてまで此処に飛んで来たのだ。

学園長からの『タカミチ君！ 直ぐに・・・の男子寮に向かうんじゃない！ 真名君が危ない！！』

それだけを聞き、此処へ飛んで来たタカミチには、今のこの状況を全く理解出来ていなかった。

（何故真名君が、こんな魔力も気も殆ど無い、一般人に等しい何かにやられてしまったんだ？

……いや、今はそんな事より真名君の救出が先だね。）

「君、今すぐ真名君から離れるんだ。」

君は何をしているかの分かっているのかい？」

諭す様なタカミチのその言葉

「龍宮さんから離れる？」

残念ながらそれは、断らせていただきます。

第一、自分が何をしているか、って分からないわけねえだろうって話ですよ。」

霊使い、紺野 柁は只今若干切れ気味であつた。

誰にでも気に入らない者がいるだろう。

性格が気に入らない。

顔が気に入らない。

喋り方が、口調が、癖が、考え方が、思考が、力が、存在が、目が、鼻が、耳が――

或はその全てが。

勿論それは柁も当て嵌まる。

しかし柁のソレに当て嵌まる者は、普通では殆どといっていいほど居ない。

現に今まで、柁が心の底から嫌ったのは、片手で数えられる程だ。

そう、“普通”では殆ど居ないのだ。

柁は魔法関係者を嫌っているが、その魔法関係者全てを、一くくりにして嫌っているわけでは無い。

魔法を使う者、立派な魔法使い《マギステル・マギ》の思想、考え、正義、etc……が柁の気に入らないソレに、殆どが当て嵌まってしまっているのだ。

だが、先程もいった様に殆どではあるが全てではない。
それに柁は魔法自体は嫌悪してはいない、寧ろ自分でも使いたい程である。

といってもまあ、その使いたい理解も、ただ単に空を飛んでみたい、というだけなのだが……。

閑話休題

柁は切れ気味……というよりも最早切れていた。

柁が嫌いな魔法使いに、タカミチも漏れることなくガツチしていたのだ。

ソノコトを一瞬で理解し、ただでさえ機嫌が悪い柁に、タカミチのあの諭す様な言葉だ……。

故に柁の機嫌はすこぶる悪い。

柁は、此処で今すぐにでもタカミチを殺してもいいが、タカミチを殺す理由がない。

例え、あの諭す様な言葉が気に入らなくてもソレだけでは柁は殺さない。

陰口や嫌味、死ね、などと言われても死ぬ可能性がどこにもないからだ。

だから柁は、基本的には魔法関係者の陰口などの事は無視してきだし、これからのそうするつもりだ。

ただ、相手がいいとゆうことは、自分も言っているということだ。

よって、柁が発した陰口や挑発で相手が実力行使来ようと来まいと、柁の知るところではない。

ただ攻撃を仕掛けるならこちらでも仕掛け。
殺しに来るならこちらでも殺す。

ただそれだけであつた。

「君は立派な魔法使い《マギステル・マギ》として恥ずかしくないのかい？」

君がどうしても、真名君から離れないとゆうのなら、僕も実力行使に出させてもらうよ。」

「これはこれは申し訳ありませんね。
俺は魔法を使うことが出来ないので立派な魔法使い（……）にはなれないんですよ。」

柁はタカミチの、まるで子供をあやすような言葉と些細な警告に皮肉を返す。

（魔力をまったく感じられないと思ったが、やはり魔法は使えないのか……気も無ければ武器も持っていない……もしかして一般人なのかな？）

いや、それならば真名君がやられる筈がないね。

油断は禁物だ。)

タカミチは、長い間戦争で培われた勘で、柩の不気味さに気が付いていた。

「確か、タカミチ先生だよな。」

大英雄ナギ・スプリングフィールドと一緒に戦ったってゆー。

でもいくら英雄でも、勝手に人の部屋にドア蹴破って入るのはどうかと思いますよ?。」

そう柩は皮肉とからかいを込めて茶化した。

ジリッ

「……………」

タカミチは、柩の皮肉を聞き流しジリジリと少しずつ、真名と柩との距離を詰めていった。

「無視かよ、つまんね。」

もういいや、龍宮さん。
場所、移動しようか。」

柁はアツサリと引く事を選んだ。

元々場所は移動しようと思ってはいた柁だが、タカミチの無視という、一番つまらない反応にウンザリし、直ぐに行動に移した。

だがタカミチには、自分の生徒がいつ殺されてもおかしくない、この状況に軽口を叩ける心情では無かったので仕方ないともいえる。

（もし此处で戦ったら部屋の物壊れちゃうもんね）
勿論柁はタカミチとの戦いに逃げるつもりは無い。
寧ろ真っ向から受けて立つつもりだ。

真っ向から不意打ち、真っ向から騙し討つ。

そのことに柁はなんら嫌悪を示していない。
きっと柁は勝つためならどんなに汚い手でも使うであろう。

もつとも、彼自身がソレを汚い手と認識しているかは、また別の話であるが。

「とりあえず、森にでも行っところか。」

柁は敢えて行き場所を口に出し、動けずにいる真名を肩に担ぐ。

当然タカミチはソレを許さない。

「そんな事させると思っかい？」

タカミチは柁との距離を一瞬で詰め、柁が窓から外に出ようとする前に、居合拳を放つ。

（もらった！）

間合いは完璧、柁は避けるそぶりすら見えない。それは完璧な初撃だったはず……が、しかし。

「へえ、珍しいね、魔法使いが肉弾戦なんて。」

ああ、そうか、確か貴方も魔法が使えないんでしたっけ？ タカミチせんせつ」

タカミチの居合拳は柁に届くことは無かった。

（おかしい、今の距離は完全に、間合いに入っていた筈なのにっ！）

タカミチの居合拳は、完全に捉えていた筈の柁に届く事は無く、柁の大分手前で中を切っていた。

ジワッとタカミチの額から冷や汗が出始める。

核心は無い。

ただ単に距離を量り違えたか、脚の踏ん張りが自分で思っていたよりも軽かったのか。

この空振りの原因など、いくらでもある、しいくらでも説明も着く。

だが、タカミチは核心は無いが気が付いていた。

長い間戦闘や戦場で培った勘、それがタカミチに訴えていたのだ、これはおかしいこれは異常だと。

どんな魔法を使ったのか。
はたまた気の応用なのか。

タカミチには全く検討もつかない。

タカミチは自分が長考していた事に気付き、急いで突き出されたままの手を引き距離を取る。

「ねえタカミチ先生ー」。

今の手加減はされてたけど、絶対に一般人に向ける威力じゃあ無か

ったよね？

良いところ入れば俺“死んでたかも”よ？」

“死んでたかもよ”そういつて柩はニヤリと笑う。

その言葉は柩にとっては私刑宣告と同義である。

故に、柩は自分の顔のニヤケを隠そうともせず、ただ笑いながら言うのであった。

「ウケケケケッ！」

それを待っていたと。

「じゃあ森の中で待ってますよ。」

その言葉を最後に、柩の姿は真名と共に段々と薄れ、消えていった――

9 幽霊（後書き）

真名エ……………

これからどうなる事やら（オイ

10 幽霊（前書き）

本作品は独自設定を含みます！

はい、遅れてすみません。

理由はバイトやらテストやら、沢山有るんですが……犯人はダンガンロンパです。

あれ面白くな？

てか、寧ろ苗木が格好良すぎて惚れた！

いつか彼の様なら主人公のSS書きたいですね。

作品募集中！なんちって（笑）

10 幽霊

キングクリムゾン！！

はーい皆さんここにやにやちわ。
枉です

あれだね、タカミチ先生ーが魔力に敏感じゃあなくて良かったね。
敏感な魔法使いは、一般人でも動けば魔力の気配も動くから、魔力で居場所が特定出来るらしいからね。

本当良かったよ。

でもタカミチ先生ーが、俺が霊を纏った瞬間、目を真ん丸にして慌てて窓から外に出ていったのは滑稽だったよ。

でも。

せめて戸締まり位して行けよ……特に玄関。

窓はまあ良いとして、自分で開けた扉位締めて行けって話ですよ。

閑話休題

しかしタカミチ先生もなかなかの自信家だね、実力も知れない相手の誘いにこのこ着いて来ちゃうんだから。

まー英雄って言われる程だし実力は確かなんだろうけど。

今回ばかりは失策？だったね。

俺がこの森に移動したのは、部屋を荒らされたくない。

つてのもあるけど、勿論別に理由もあるんだ。

この森は言わば俺の庭なんだよ。

この1年間色んな実験を試みたりして、木とか地面とかには結構な量の霊が憑いている。

例え英雄だとしてもこの森で俺に勝つには、それこそ森を吹き飛ばさないと無理だろう。

あーあーそれにしても、もっと霊が欲しいなー。 どうにかして数ヶ月だけでも良いから魔法世界に行ければ、こんな小細工しなくても余裕で勝てるのになー。

俺って数で攻めるのが基本だから、霊を集め無い事には戦力の増強も出来やしない。

そしていくら麻帆良学園が広いつて言っ たって発生する霊の数は限られてくる。

だからいくら霊を従わせる力があっても、肝心の霊が居なくちゃ話にならないよ。

「はあゝ、なんか良い案無いかなゝ」

ん森の霊達が騒いでるな、成る程もう少しで追いつくのか。

なら、

「どっこいしょっ!」

俺は、龍宮さんを肩から降ろし、木にもたれ掛かせ霊纏わせる。

これで魔力オンチのタカミチ先生が来ても、龍宮さんに気が付く事はないだろう。

俺は霊達に縛られ動けない龍宮さんをみる。

あれ?　なんか龍宮さんが心なしが顔が少し緩んでる。

龍宮さん、どうしてそんなに余裕があるのかな？

そしてその余裕を隠そうとすらしていないし。

ペットに成ることを心に決めたのか、それとも自分を犠牲にする覚悟を決めたのか――！

ウケケケケケ、成る程そうゆう事か、ケケケこれでもう龍宮さんは、俺のペットに成る以外の選択肢は失ったも同然だな！

楽しみが出来た事だし、先ずはあの先生か――

ん？そういえばなんでタカミチ先生の攻撃が俺に当たらなかったかって？

ウケケケ、なーに簡単だよ。

先ずはその場で即興の俺と龍宮さんの形をした物を、取るに足りない糞雑魚い霊で造る。

ただ姿形を真似させるなら命令して《成り代わり》をさせればいいしね。

そして俺達は霊で存在を薄くしつつ後に下がる。

当然タカミチ先生の拳は俺の形をした霊に当たるけど、何分糞雑

魚の存在なんて殆ど無いような霊だ。当然当たったことになんぞ気が付く訳もなく呆ける。

って寸法さ。

あつ！ ついでに《成り代わり》ってゆうのは霊よく使う手で、自分の姿を殺したり監禁したりした奴、寸分も違わずソックリにし、その人物へと成り代わってその人物として生きて行きその者の人生を奪うとゆう恐ろしい者なのだっ！

まあ、あくまで寸分違わソックリなのは表面だけなので、敏感な魔法使いや、霊感が強い者なら直ぐに気が付くから、使えるのは魔力音痴なタカミチ先生位なだけだね♪

テレッテッテテー！

証はスキル、《霊改造・創作》を手に入れていた！！

って、そんな事してる場合じゃないか――

▲

▲

▲

柁と真名が消え、部屋に一人残されたタカミチは、このままあの二人を追うか、それとも一旦学園長に連絡を入れるか迷った。

その思考は僅か一瞬、直ぐにタカミチは学園長に念話で連絡する時間も、今こつやつて考えている時間も惜しい事に気が付き、柁と真名を追う森と急いだ。（今、こつやつて考えている間にも真名君に何かあるかも知れない！急がないと！）

・
・
・

タカミチが森へと入った頃、柁の肩から地面へと降ろされた真名はこんな状況にも関わらず安心していった。

魔法関係者にとってタカミチは正しく英雄。

当然ソレに見合う実力も持っている。

いかに柁は特殊な力の持ち主だとしても、一介の高校生が魔法世界の英雄の一角に勝てる筈がない。

（あと数分もすればタカミチ先生が来て私を助けてくれるだろう。それまで待っていればいい。）

真名は安心していった。

“自分は”助かるだろうと――

そう、自分が何故柁を殺そうとしたのかすら忘れて。

ザッ

木の上から人影が落ちる。

木の上から降り立ったのはタカミチ、

「やっと追い付けたよ、さあ、真名君を渡すんだ。

今ならまだ学園長も、それ程厳しい処分は下さないと思うよ。

それに僕からも学園長に言っておくよ。」

柁の前に降り立つなり。

又もや上から目線の悟すような言葉。

自分が正義だと信じて疑わない言葉。

もしタカミチに、自分は正義か？と聞けば間違いなく違うと答えるだろう。

ソレは嘘や謙遜等ではなく、実際本当にそう思っているのだろう。

だがタカミチは心の奥、所謂深層意識？では自分が正義だと、自分が正しいと信じて疑っていないかった。

自分を正義と疑わぬ傲慢。

それはタカミチだけには限らず、立派な魔法使い《マギステル・マギ》全員に言える事だった。

己の力（魔法）を自慢げに振るい、力の無い者達を見下し優越感に浸り、悪と決め付けた者は徹底的に排除する。

そう、正義の名の元に。

「傲慢だな……」

ぼつりと杵が口をこぼす。

「傲慢なんかじゃないさ。」

「いいや傲慢さ。」

現に今、己を正義疑わず、
俺が悪だと決め付けて、力が無いと決め付け、どうせ自分には勝てないと嘗めている。

タカミチ先生は実は学園長から何にも聞いて無いんじゃないの？」

「……………」

前半はともかく後半は凶星を突かれタカミチは言葉を返せない。

「でも良いんだよ。」

タカミチ先生は英雄何だから、傲慢で良いんだ。
先生には、それだけの力（魔法）があるんだから。

むしろ傲慢になると言う方が酷だ、力（魔法）があるのだから、力（魔法）の無い者を見下して当然。

戦争だって、勝てば正義で負ければ悪だもんね♪

だとすると、勝者＝正義なら強者＝正義にも置き換えられる。

そして俺も結構強い、よって俺＝正義にもなる訳だ。

でもタカミチ先生も強者なら、タカミチ先生＝正義になってしまう。

最終的にタカミチ先生＝俺になる。

だがこうやって俺とタカミチ先生は敵対しているわけだ。

タカミチ先生≠俺、ならそれはどちらかが正義ではないって事だよ
ね？

俺かタカミチ先生か、どちらにせよ強い方が正義って事になるね、

なら俺が正義だ！

なぜなら俺はタカミチ先生より強いから！

覚悟しろ殺人未遂で不法侵入の犯罪教師め！」

タカミチは啞然とする。

だがそれは、そのぶっ飛んだ思考ではなく、自分があの英雄と呼ばれているタカミチと知っていても、なお勝てる気で居ることだった。

ただ自分の力を過信しているのか、それとも先程から感じていた不気味な感覚がその自身の顕れなのか。

タカミチにはソレを量りかねていた。

だが――

「フツ！」

タカミチは身体強化魔法《戦いの歌》を使い、柁の部屋の時の数倍はある距離を一瞬で詰める。

考えていたって埒は明かない、多少なりとも手こずるだろうが、ここは真名君優先だ。

そう考えタカミチは、柁に対する違和感を無視し、強行した。

「悪いけど、次こそ一撃で決めさせて貰うよ！」

タカミチは一瞬で距離を詰め、多少の手加減をしつつも速度は殺さず、柁の腹へと居合拳を叩き込む。

——グチャ

それは不快な音。

タカミチの拳が、目の前に居る者の腹をぶち抜いた音。

ビチャビチャ——

その体を貫いた腕と貫抜かれた体との間からベトベトとした赤い液体が流れたす。

「なっ！そんな！？」

タカミチはまるで『やってしまった！』とでも言いたげに声を上げる。

タカミチは居合拳を速度は落とさなかった物の、力は悪くても骨が何本か折れ、後ろに吹き飛んでいく程度にまで落とした筈だった。

だがタカミチのその腕は柩の体を易々と貫いた。

『力加減を量り間違った』

そうゆう可能性もあるかも知れないが、断言出来るであろう、それは無いと。

あくまでもタカミチは魔法世界の長い戦争を終わらせた英雄の一人である。

その英雄が今まで多くの敵を葬って来た己の武器である拳や脚で、柩の部屋の時も含めれば2度も初歩的なミスを犯すだろうか？

そう答えはNOだ。 例え油断や慢心があつたとしても、その程度で一タミスをしている様ならば、彼は英雄などとは呼ばれることは無かつただろう。

「ほら、そーやってまた呆けてる。

英雄だか何だか知らないけど、ちょっと弛んでるんじゃないですか？」

いくら誘拐犯だったとしても、教師が生徒を殺してしまい呆けていたタカミチは、その声の方を向き驚く。

「あのさータカミチ先生、こっち見てる余裕あんですか？」

ズズズツ――

その言葉にタカミチは咄嗟に自分が貫いていた、“何か”を見る。その“何か”は先程までは確かに柁の形をしていたが、柁の命令が切れた今はもう“成り代わり”も解け元の姿に戻ろうとしていた。

顔は崩れ、ドロドロとまるで溶け出したアイスクリームの様にタカミチの貫いている腕を包み込む。

いつの間にか腕は増えておりその“何か”体中から腕や口や顔を生やしていた。

「くっ！」

オッ アオッ アオオ…………

その霊は苦しそうに、まるでタカミチに助けを求める様に纏わり付く。

グチャ――

だがタカミチ自分の腕をその霊の中から容赦無く引き抜く。

それでも尚、こちらに近づくとしていたのを察つたタカミチは、後へと下がり、体制を立て直そうとしたのだった。

その光景を柎が静に嘲笑っているのも知らずに。

「分かり易いんだよ——」

10 幽霊（後書き）

なんだかんだでタカミチは嘸ませ。

次は早く投稿し………たいなあゝ

11 幽霊（前書き）

今回はチョットは早く更新出来たかな？

別件

なんだかクロスしたい今日この頃。

デュラララのセルティをデュラハンで出したりとか……

他にも何か、クロスさせてみたい！ってのがあったら感想の方をお願いします。

もしかしたら、クロスするかもです。

まあ、する前に皆さんの意見を聞いてからですけど（笑）

11 幽霊

「分かり易いんだよ。」

そう、全くもって分かり易い。思わず馬鹿にしてんの？って聞きたくなる程にね。

俺はいつもこの世界が実は、俺がよく見るアニメや本の中の世界なんじゃ無いかって思う。

魔法に化け物に英雄。

どれも空想の産物と一般人は思ってるだろう。

もしこの世界が空想の産物ならば、きっと主人公は大英雄ナギ・スプリングフィールドかそれに深く関わる人物だろう。

弟子とか息子、娘でもいい、その主人公達がアニメや漫画よろしの試練や危機をくぐり抜け、可愛い可愛いヒロインと迎えるハッピーエンド。

この長い長い道のりが漫画やアニメの世界だと知ったらどう思うだろう。

怒りに、悲しみにそして絶望。

それは最もだろう、自分の成した事全てが最初から決められてい

たのだから。

仕方がないとも言える。

だが、ハッキリと俺は言わせて貰おう。

ふざけるな！ と。

そうだな、多少の怒りはあっても良いだろう。

だが悲しみ？ 絶望？

お前はヒロインとイチヤイチャなハッピーエンドを迎えあんなことやこんなことをして、それ以外に何を望む！？

ましてや、ハーレムエンドなんて達成しようものなら……！

くし d j k m f d さ j h d h j k s し お s k x m n y そ k ん ぐ い お
d k s あ ん x ん ぶ い お k j ん ち ゆ い そ ん ぢ ゆ い お k j h さ m ん ぶ ん
負 御 k み お l m ん ひ お s x m 5 4 3) (g し m ん v ふ ゆ k d r ち ゆ
お い j つ m ん b v f t d x s え r t y k j h g f x c b x せ r d c
v f g j m k l ふ え お k x j そ x k め う い お k m g ふ い l 日 尾 x k
c む い お k m ん b x k !!

って危ない危ない、今にも嫉妬に狂いそうだったよ。

え？ もう狂ってたって？

すいませんが記憶にございません。

つまりは主人公って贅沢じゃね？って話。

閑話休題

後へと下がったタカミチはその直線上にあつた木に軽く背を預ける。

「ウケケ……」

おっと、我慢できず思わず笑いがこぼれてしまった。

もう一度言うが此処は俺の庭だ、ホイホイ俺について来た時点で俺の勝ちが決まってるんだよ、タカミチ先生♪

アッ アッ アアアウゝ！！

タカミチが背を預けていた木から、人の形をした霊の上半身が出てくる。

タカミチはずっと俺に注意を向けており、霊に抱き着かれ、直ぐに木へと縛り付けられる。

「こゝ、これは！？」

タカミチ先生もやっと俺の力の正体に気が付き初めた様だ。
霊っていつても一度認識してしまえば靈感がない人にも見えちゃうしね。

ほら、よく何才までに霊を見なければ一生見ないって言うでしょ？
あんな感じ。

まあ俺の場合は嫌が応でも見えちゃうんだけどね♪

▲ ▲ ▲

S i d e タカミチ

駄目だ。

これはもう手加減云々を言っている場合じゃない。

彼は何やら異形使いのようだし、もう一般人とは思わず僕も本気でいかないと！

ブチッ

僕は、後の木の影に隠れていたのだろう、異形の拘束を破り彼へともう一度距離を詰める、直ぐ目の前まで来ていた先程の異形をすれ違い様に殺す。

その時、異形は血も出さずただ、丸い薄く輝く粒子状にバラバラになったのは気になったがそんな事にかまけている暇は無い。

相手は普通の一般人ではなく、異形使いだ。それを知った以上手加減をする必要無いし、無くなった。

僕は異形使いへと駆ける。

だが――

ヒュッ！

巨大な黒い鎌が僕の行くてを塞いだ。
僕はその攻撃を横へと跳び避ける。

その異形は脚……と、言うよりも下半身が存在しておらず中に浮いていた。

異形とはゆうが、その上半身はフードを被り顔は見えないが、正しく人そのものだ。

「一体これは!？」

鬼でもなければ妖怪でも、こんな者は見たことが無かった僕は、無意識に言葉を発していた。

だが、そんな僕の咄嗟に出たの問にも彼は律儀に答える。

「んー、教えるか! って普通は言っただけろっけど、俺は今(タカミチ先生が思った通りに動いてくれるから)機嫌が良い、よし! ならば説明しよう!！」

「……………」

情報が多い事に越したことは無い。そう考えた僕は素直にその話を聞くことに聞くことにした。

「テケテケがただ浮いてるだけってちょっと地味だったんで、霊達をまほネットで買った大鎌に大量に憑かせて、呪いの大鎌として持たせてみました。」

説明終了! 戦闘再開!

彼の終わり! とばかりの声に反応したかのように、テケテケ? は再び大鎌を振り下ろそうとする。

テケテケ? 霊?

彼は異形使いじゃ無かったのか？

ブンッ――

テケテケが振るう大鎌を混乱している頭で急ぎ、しゃがんで避ける。

「式神使いや、鬼使いは聞いた事が有るけど、幽霊を使役するなんて聞いた事がないよ。」

さしずめ霊使いと言った所かな？」

勿論混乱を悟らせない為に、余裕が有るように彼へと悠長に話し掛けるのは忘れない。確かに、霊使いなんて聞いた事も無い。だけれどこの程度なら脅威には値しないっ！

テケテケは大鎌を幾度と無く振るうが、タカミチに当たる所か掠る事すら無かった。

大振りでテケテケに大きな隙が出来る。

そこだっ！！

「居合拳！」

隙を突かれ、加減をしない居合拳をまともに受けたテケテケは無残に砕け散った。

やっぱりだ、彼の霊は一匹一匹は大して強くない。最初はただの一般人と思って油断していたけど、仕組みが分かって仕舞えばコチラのものだ！

「あーあー、これでもテケテケは、俺の霊達の中でも三本の指に入った位なんだけどな！。

そんなにアッサリ倒されちゃうと結構凹むね。」

手を開きながら長々と喋る彼の言葉を無視し、僕はまた今度は自らの最高速度の瞬動を使い彼との距離を詰めた。

今回僕は彼から目を離していない。絶対に先程の様な失敗なんてない！

「居合拳！！」

「……ちよつ、はやつ！」

完璧に懐へと入った。

僕の全力の瞬動が想像以上に速かったのか、彼は慌てて手で防御しようとするが、残念ながら僕の居合拳は腕程度の防御じゃあ全く話にならないよ――！

「くっ！」 彼の下腹に僕の拳が突き刺さる。この攻撃で彼は死んでしまっただろうが、来年にはネギ君もくるんだ。

真名君を誘拐し、殺そうとする人物なんて近くに置いて置けない。残念だけど今此処で倒させて貰うよ――！

彼の下腹に向けられた僕の拳は防御の腕を吹き飛ばす。

よし、当たっ――

僕の意識はそこで途切れた。

その薄れ行く意識の中で最後に見たには、左腕は肘から下がなく、下腹にはポツカリと丸い穴を空けた彼が、僕の師匠を喰べている姿だった。

▲ ▲ ▲

ムシャクシャ――

ふう、危なかった。

まさかタカミチ先生の瞬動がこんなにも速いなんて……それにやられるとは思って居たけど俺のテケテケがこんなにも簡単にやられるなんて……マジ凹むな。

ムシャクシャ――

うん、やっぱりどうにかして魔法世界に行かないとな。

あーあー、左腕と下腹まで無くなっちゃったよ、全く痛いな。

流石英雄だ。寧ろ俺の方が英雄と呼ばれる存在を侮っていた。

うん、反省。

「でも咄嗟に、こつそりタカミチ先生に憑いていた霊を奪っておい
てよかったよ。」

ムシャクシャ――

本当によかった、もしコレがいなければ、もう一撃を心臓にくら
って俺は死んでいたかも知れないしね。ムシャクシャ――

え？お前さつきから何喰ってるんだって？

そんなのさつきタカミチ先生から奪った、霊に決まっているじゃ
ないか！

いやー、確かに強力な霊だったけど……いや、だからこそ、俺の
体の一部に成るに相応しい。

しかし本当に危なかった、もしタカミチ先生が下腹じゃなく心臓
を狙ってたらヤバかった。

もっともっと、強力な霊を喰らい、取り込めば心臓も取り替えら
れるのになあ。

ユクユクは俺の体に全ての霊纏わせ、憑かせ、飼育するのが目標
だな。

そうすれば俺自身もかなり強く成れるし、誰にも負けない。

ふふふ、俺の可愛子ちゃんと迎えるハッピーエンドが目に見え
ぜ！！

よし！なら先ずはどうやって魔法世界に行くかだ！
幸にも、コチラには戦利品のタカミチ先生と俺のペット（飯）が
いる。

これを上手く使えば、学園長からそれなりの譲歩を引き出せる…
…と、良いなあ。

ゴクン――

「ふうー、ご馳走様。

中々美味しかったよ。やっぱり強力な霊は違うね！」

傷も殆ど消えたし、テケテケ達の残骸も黒田に喰べさせたし一先
ず一件落着……って、ん？

ガサガサ――

あ、そういえば龍宮さん忘れてた。

ウケケケケツ、俺がタカミチ先生を倒しちゃったから慌てるのか。

そんなに身をよじらせて、全く可愛いな。

しかし、あの時の余裕満々の顔も中々可愛かったぞ。
勿論、脳内HDDに永久保存したから安心してくれ。

取り敢えず拘束を解こうか……。

シュルル――

バツ！

龍宮さんは、俺が霊による拘束を解いた瞬間逃げ出そうとする。

「ざーんねん！」

でも俺がパチンツと指を鳴らすと、地面から生えた白手が走る龍宮さんの足を掴み転ばせる。

ゴロンッ——

「クッ！」

「もー、そんなに睨まないでよ。」

これから俺のペットとして生きて行くんだから。

お仕置きしちゃうよ。」

「だ、誰がそんな事をするか！」

それに私はお前の問いにまだ答えてなどいない！

勝手に決めるな！！」

ウケケッ、全く可愛い位反抗的だね、

でも……

その言葉待ってたよ——

11 幽霊（後書き）

いたい、たつみーは何処まで行くのかは筆者にも不明です（笑）

12 幽霊（前書き）

うゝん難作・駄作しかも短い。

12 幽霊

「もー、そんなに睨まないでよ。」

これから俺のペットとして生きて行くんだから。

お仕置きしちゃうよ。」

そう言ってアイツは笑う。

冗談じゃ無い、誰がこんな奴のペットなんかになるか！

コイツにペットとして生かされる位なら、死んだ方がまだ！

それに、誰が師匠を見捨てるもんか！自分だけ生きるなんて出来る訳がない！

「だ、誰がそんな事をするか。」

それに私はまだお前の問いに答えなどいない！

勝手に決めるな！！」

そつだ勝手にに決めるな、私は師匠を見捨てる事なんて出来ない。

出来る筈がない！

なのに……なのに一体なんなんだ、この違和感は、私は何か間違った事を考えただろうか？

いやそんな訳は無い、きっと思い過ごしだろう。

そう考え私は、その違和感を勘違いだと決め付けた。

「ふう〜ん、まだ決まってる無かったんだ。

そりゃ驚いたよ、でもまあいいや、じゃあ今ここで決めてよ。」

ガチャンガチャ

だがアイツは私の言葉にわざとらしく驚き、そう言って柩は私の目の前に二つの物を放り投げた。

私は思わず目を見開く。

アイツが私の目の前に放り投げたのは、鋭利なナイフと魔眼を使わなくても分かる程の悍ましい数の霊が宿った首輪だったのだから。

▲ ▲ ▲

「ほら、自分で選びなよ。

師匠とやらを助けたいなら、そのナイフで首をかつ切れ

でももし、その師匠とやらを見捨ててまで生きたいって言うなら、その首輪を自分で首に付けて俺の足元にひざまずけ。」

あーあー、俺って優し過ぎるな。

逃げ出そうとした罰の与えず、更には選択しすらも与えてるなんて。

こりゃー聖人も真つ青な大盤振る舞いだわ。

ま、といつても龍宮さんの答えはもう決まっているようなものだけどね。」

うーん、ペットにしたらなんて呼ぼうかな？

確か本名は龍宮真名、だから……マナにゃん？ たつにゃん？ 意表を突いてマナたんってのもいいなあ。」

抱き着いて一緒に寝たり、したらきつと物凄く幸せだろうなあ。

っていやいや、別に邪な考えがあるわけではない、断じてない！

普通の飼い主だってペットと一緒に寝る奴だっているだろう。

だから、一緒に寝てて“たまたま”胸に肘が当たっちゃったり、“たまたま”寝返りをうつた拍子に頬つぺたにチューしちゃっても、それは事故であって、故意にやった訳ではないのだ！

あ！でも普通のペットにチューする飼い主もたまにいますよね！？

ということは……グヘヘヘヘ。

あくまでも俺が龍宮さんチューしても、それはペットとしてのスキンスリップとして許される範囲とゆうことかっ！？

ヤバイ、鼻血出そう……。

んーてか、龍宮さんはまだ悩んでいるのかな？

待つってあんまり好きじゃないし、そろそろ決めさせるか。

「ねえー、龍宮さんまだ決まんないの？さっきまでは『答えなんて決まっている！』 見たいな感じだったくせに、あれっではったり？

ってなわけで、あと10秒で決めてね。」

「答えなど既に出ている！黙っている！」

ウーン、チョットその言葉遣いは目に余るけど、まだ俺のペットになった訳じゃない。ココは大目に見よう。

それにしてもあれだな。

俺の挑発に律儀に反応して威嚇するマナたんも可愛いな……あつ！マナたんて言っちゃった♪

お、マナたん（もう固定）がナイフを持った！手をプルプル震えさせながら首へとナイフを持って行ってる。

一見してみるとマナたんは、覚悟を決めた様に見えるけど……ウケケケケツ。

さあ、お楽しみは、ここからだ――

▲ ▲ ▲

ナイフを持つ私の手がどうしようも無く震える。

刺せ、刺すんだ！自らその首を切り落とせ！

ナイフを首へと近づけるが、これ以上進んで行かない。

一瞬脳裏に、このナイフでアイツを突き刺してやろうと考えるが、それは直ぐに否定された。

先程のタカミチ先生との戦いを思い出し、ソレはすぐに無駄だという事に気が付いたからだ。

「あれあれ？マナた……龍宮さんは自分を犠牲にするんだ！。

さっきまでは師匠とやらを見捨てる気満々だったくせに。」

うるさい。

私が師匠を見捨てる気だった？そんな事あるわけ……

「んんー？もしかして『私がそんな事するわけがない！』とか思ってるわけ？」

「……………」

「もしそうなら笑っちゃうよね、だつて——」

ついさっきまで師匠を見捨てて、自分だけ逃げようとしてたんだから——

パキンッ

心が折れる音がした。

首へと向けられていたナイフは、手の中から地面へと滑り落ちる。

「そ、そんなこと——」

「あるだろ？師匠の事も忘れ、ただタカミチ先生が自分を助けてくれると思い、余裕そうな顔を浮かべていた、龍宮真名さん？」

私の感じていた違和感の正体が分かってくる。

そうだ、私は……いや、違う。

「違う！」

（うわー、面倒臭いな、サッサと認めろよ真実何だから……）

「何が違うんだよ、実際そうだったろ？」

「違うっ！」

（んー、なんかイライラしてきたな。）

「さっきもそうだ、俺から逃げようしてただろ？」

本当に師匠が大切なら、一人で逃げられる筈ないよね？」

「違うっ！！」

（はぁー）

「だからどこが違うん……」

「違う違う違うー!!」

(ブチッ――)

「ならその首をこのナイフでサッサとカット切れっ!!」

「あつ……うう……。」

(いやね、俺もあれよ?可愛子ちゃんの為ならいくらでも我慢出来るよ。

でもさ、あくまでもマナさんはペットな訳でさ、確かに可愛いけどもうマナさんは俺の物であつて、しかもさっきから逃げ出そうとした事とか、結構大目に見てるんだ。

だから何て言うか……ついやってっちゃうんだ

それにもし、コレでもダメだったら……“もういいや”)

アイツが私を睨み、再びを数え始める。

その手にはテケテケ?とやらが持っていた悍ましい大鎌が持たれていた。

戦場で何度も感じた感覚。

きつとアイツはカウントが0になると同時にその大鎌を振り降ろし私の首を叩き切るだろう。

（私はここで死ぬのか？）

嫌だ

[illegible]

死にたくない……死にたくないっ！！

そうだ！師匠はいつも私の事を第一に考えて居てくれたじゃないか！

それに、**師匠はもう既に死んでいるんだ！？**

例えば、私が今ここで死んだとしても、師匠が生き返る訳では無い。

しょうがないんだ！師匠もキツと分かってくれる！

そう、しょうがないんだ。仕方がないんだ。

だから……………

私は恐る恐る、その首輪に手を伸ばし……………ゆっくりと首へ近づけ

……………

ガチャリ――

はめた。

そして、私はアイツの靴を舐める様にひざまづく。

「ウケケケケッ！」

頭の上から笑い声がとどく。

「ハッハハハ……………ハハハハハハハハハハッ！」

何故だろう笑いと涙が止まらなかった。

しょうがないんだ

しかたがないんだ

どうしようもないんだ

他に方法がないんだ。

そう、こうするしかないんだ。

だから――……

《私は悪くない》

12 幽霊（後書き）

うまくマナさんの心理（笑）が書けたか不安です。

是非、アドバイスをお願いします。

結果

最終的にマナさんは自分を正当化して生き残りましたとき。

これからは龍宮真名改め、マナさんとしての新しい人生が待っている事でしょう（笑）

13 幽霊（前書き）

遅くなりました。

すみません、今回も短いです。

13 幽霊

えっ、タカミチ先生え？

先生ならほら、ソコに埋まってるよ？

閑話休題（笑）

「んー、よく出来ましたー！

頭を撫でてあげよう。」

そう言つて俺はマナさんの頭を撫でると、目を細め気持ち良さそうに頬赤らめ、ナデボが完成……するわけもなく、マナさんは酷い目つきで俺を睨みながら歯を食いしばっていた。

俺は、そんな風に俺を睨むマナさんも可愛……じゃなくて、そんな風に俺を睨むマナさんに、“お仕置き”をしないとイケないな。

飼い犬が飼い主（ご主人様）を睨むなんて言語道断だっ！調k y
……仕付け（お仕置き）してやる！！

いやいや！　そしてゆくゆくは、自らお仕置きを望む様に仕付けて……なんて思ったり、シテマセンヨ？

まあ取り敢えず……

「ガッ……！」

マナさんに付けられている、首輪が首を絞める。

「なーにご主人様を睨んでるの？」

ほら、笑って笑って。」

「クソ……っがっあがぁー！！！」

あーあー、素直に言うこと聞かないからそうなるんだよ。
マナたんって以外に天然？

それにしても、我ながらこの首輪を造った俺は凄いな。

世界中どこでも、24時間365日、何時でも何処でもマナたんを（首輪に憑ている霊を使って）監視出来て、俺に対して良からぬ思いや企みをしたときは自動（オンオフ可能）で首輪で首を締め付けられる。

しかもそれは反抗すればするほど強く締め付け、下手をすれば死んでしまうかも知れない。

いや、実際は死ぬまではやらない様に命令して有るよ？だってコレはあくまでも調……教育なんだから。

俺は、自分で自分のペットを殺して、快楽を覚える様な特殊性癖有する変態なんかじゃあ無いしな。

おつ、やつと言う通りにしたのか。

マナさんは、首が締め付けられて苦しい中、無理矢理に作り出した笑顔を俺に向ける。

うん！やっぱり可愛い女によこは、笑顔が一番だよね！？

「いい子だね、取り敢えずおすわりだ。」

「クッ、分かつ……はい。」

うゝん何かイメージと違うな。

っ！そうだ！

「返事はいじゃない！『わん』だっ！」

「ガッ……ワ、わん」

何故かまたもやマナたんの首輪が絞まる。

えっ？理不尽？

いやいや、マナたんは俺のペット何だから、俺の事を第一に考えなきゃ駄目だろ。

だからあそこはシンプルに『はい』じゃなくて、俺の気持ちを察して『わん』するべきだったんだよ（ニヤン又は、にゃーでも可）。

次からは気をつけて　　って事を言外に示した所謂、愛の鞭つてやつで。

だからコレも俺なりの愛なんだ。

そう、今俺の鼻から流れ落ちるコレも、キツと愛なんだ――

▲　　　▲　　　▲

「ちと、遅すぎはせんかのう……」

近衛近右衛門は、麻帆良学園女子中学校に存在する、学園長室で

一人些細な不安がよぎる。

何故女子中学に学園長室が在るのか？と教師達が生徒達に聞かれれば、その多くは言葉を濁さざるをえないだろう。

つまりは一般の教師が知らされ無い理由が在ると言うことだ。

大英雄ナギ・スプリングフィールドの息子、ネギ・スプリングフィールド。

そう、その英雄の息子がこの学園にやって来るのだ。

立派な魔法使い《マギ・ステルマギ》にとって、魔法世界の大戦争を終決へ導き、その仲間と共にこの世界に平和と平穏を取り戻した、大英雄ナギ・スプリングフィールドの名前は絶対である。

『その息子がわしの学園へやって来る』

『わしが次代の英雄の教育を任された』

近衛近右衛門は歓喜した、いかにして次代の英雄を育て上げるか、いかにしてその力を向上させるか。

その計画の一端に、今後重要なキーパーソンに成るであろう黄昏の姫御娘と、そのほかの将来有望な従者候補、そしてあるうことが、その黄昏の姫御娘たる最後王族、神楽坂アスナと仲がいい同じルームメイトである、自分の孫さえも利用する事を決めたのだった。

次代の英雄の為と言い訳をして……

その時から、近衛近右衛門は自分の孫が入学する予定の女子中学に学園長室を置き、次代の英雄ネギスプリングフィールドの為にクラスを作ろうと思っていたが、実行した。しかしそのせいで、周りからは、学園長ロリコン疑惑がかけられるがそれはまた別の話である。

タカミチに連絡をいれてからもう既に、2時間が経っている。

それにも関わらず、一向にタカミチからは連絡が入らない。

ついに痺れを切らした近衛近右衛門は自分からタカミチに連絡をいれたが、全く反応がない。

（もしやタカミチ君も柁君と戦闘になったのか！？

よく思いかえせば、わしはタカミチ君に詳しく状況を話しておらんかったのう……）

一人の生徒の命が掛かっている。

そんな事は分かっているはず。だが近衛近右衛門は依然として、楽観的だった。

今、近衛近右衛門の頭の中にはネギ・スプリングフィールドの事以外は無く、

『面倒事に構っている暇は無い。』

これが近衛近右衛門の本音だった。

ようするに、言葉にはしないが今は一人の従者候補よりも、次代の英雄。

ということだ。

そう、だから今から起こる事も近衛近右衛門は、深く考えず、軽率に、楽観的に決めてしまうのだ。

それが今後どのような結果をもたらすのかも知らずに……

▲ ▲ ▲

「お手っ！……って右手だけ？あれ、おかわりが右！？」

どうでもいい事で、ウーウーと頭を抱えて唸る杵を真名は冷めた目で睨む。

（今なら……）

スルッ――

真名は太股の巻かれたガンホルダーからユックリと銃を抜く。

柩は頭を抱えており全く気が付いていない。

（イける、今ここで次こそ……っ！）

「ガッ――っ！！」

引き金を引こうとする腕に黒い何かが、絡み付き引き金を引けない。

そして引き金を引けないと理解する前に、首輪が締まった。

「ガッ……ハッ――っ！！」

カランッ

真名は銃を地面に捨てるが、一向に首輪は緩む気配が無く、息が出来ない。

（銃は捨てた！なのに何故首輪が緩まないっ！？）

真名は自分の柙に対する悪意、又は殺意によって自動的に首輪が絞まるのか、ソレとも柙が随時命令して、首輪を締めさせていたのかを確かめる意味でも柙を殺そうとしたのだが……

当然真名は、悪意や殺意で自動的に首輪が絞まるのなら、悪意や殺意、武器を無くせば首輪も自動的に緩まると思っていた。

だが、結果は首輪は自動絞まるが、解除は柙が許可するまで緩まない。

絞まるのは自動だが、解除は手動。

当然柙は、頭を抱え唸っている真つ最中のため真名の首輪は緩む筈も無い。

そもそも締まっていることすら知らない。

気が付いて欲しくても、声が出ず、距離は2メートル程、今の真名には遠過ぎた。

「ん？」

柙がようやく真名がもがく音に気付く。

（よかった……コレで助かる。コイツを殺すのは次の機会を見計らって……）

「マナたん何してんの？」

（見計らっ……）

「なに、なに？芋虫ごっこ？」

（見計……）

「モゾモゾしてるマナたん可あー愛あーいーいー！！」

（――。――）

真名に次の機会は来るのだろうか？

13 幽霊（後書き）

学園長の場面は作者の勝手な解釈です。

ぶっちゃけ学園長、あんなに従者候補集めてたけど、絶対何人か死ぬのは想定内だったよね……

勝手な解釈です。

14 幽霊（前書き）

作者は魔法先生の一部（神多羅木、式集院、瀬流彦）が結構好きです。

でも、アニメも原作も未視聴で二次小説からの情報しか無かった為、Wiki等で情報を探しつつの執筆で遅くなりました。

それでもオリキャラ化しているかも知れませんが……どうぞ

14 幽霊

「学園長、お電話です。」

しずな先生のその言葉に、近衛近右衛門はたらりと汗を流す。

近衛近右衛門が思い出のは、真名君からだった筈のあの電話。

あの時の様なこの状況に、感じるデジャヴ。

それは近衛近右衛門が今もっも恐れている事で、決してあつてはならない可能性だった。

『タカミチ先生が出来損ないの魔法生徒に敗北した。』

そんな事が周りの魔法関係者に知れば大問題だ。

タカミチのみならず、学園長……はたまたこの、麻帆良学園の信用に関わる重大な事だ。

その麻帆良学園の最高責任者である近衛近右衛門は、『そんな事が在るわけがない。』と思いつつも、その不安を完璧に拭いきる事が出来ずにいた。

（そんな事、あるわけがないじゃろう……だが、もし万が一そのような事が在ったら、来年のネギくんの麻帆良学園での教師の兼も無くなってしまうかもしれんっ！）

何も知らぬ者から見れば『大人が一人生徒に負けてしまったただけだろう。何をそんなに騒いでいる。』と、言うだろうが、それは、その大人が普通の魔法先生の場合の話だ。

《英雄》この言葉の意味は、多くの人が思っている以上に重い。

魔法世界消滅の危機を救い初めて得られる称号。そしてその《英雄》が一介の魔法生徒に負かされた。

それは、タカミチが本気かどうかは大した意味を持たない。問題なのは、あくまでも形式上だけだが誘拐された生徒を救出に行き、敗れたと言う事だった。

仲間内や实力を見る為の戦闘で負けたのなら、例えソレが本気を出して負けただろうが、手加減して負けただろうが、関係は無い。

だが今回はダメだ。負けてはいけない。

本当にもし万が一タカミチが負ける様な事が在れば、この麻帆良学園は（誰もが、決して口には出さないが、）英雄でさえも墮落する場所と言われるであろう。

そうすれば大英雄の息子であるネギ・スプリングフィールドの修行の場として相応しくない！と言うものも出て来るだろう。

「しずな先生、少し外してくれんかのう？」

「?……わかりました。」

もし、万が一を考え、近衛近右衛門は通話の内容を聞かれぬ様、自分以外の者をこの学園長室から退席させる。

ガチャ——ボタン……

しずな先生の退室確認した、近衛近右衛門は少し息を整え、冷や汗かく右手で握った受話器を握り直し、ユックリと耳へと近づけ——

『あ、こんちゃー学園長。』

——頭が真っ白になった。

）

「あ、こんちゃー学園長。」

柁は学園長の気持ちを知ってか知らずか、『さっき振りー』とでもばかりに気軽に話掛ける。

『……………。』

近衛近右衛門は今だに現実を直視することが出来ず、言葉を返す余裕すら無かった。

近衛近右衛門は後悔する。

真名が敗北したのにも関わらず、『魔法使えるかも知れないが、所詮魔法生徒』と柁を賞め切り、タカミチを録な説明もせず柁の元へと向かわせた事を……

そして思考をフル回転させ考えるのだった。

如何にしてこの真実を隠蔽するかを――

▲
▲
▲

やべえ……超ドキドキするんですけど!?

やあ、みんな。

只今俺は今だからって、誰もが到達した事がない、禁断の聖地へと向かっている。

そう女子中学高だ。

男ならばキツと誰もが、一度は憧れる（仮）秘密の花園だ。

だが、多くの男がその大きな壁の前に膝を折ってきた。

一つ

普通では入る事は許されない、その女子中学高に潜入する為の合理的な理由作り。

年上の高校生が、それも単独で女子中学に潜入にする事が出来る程の、合理的な理由。ソレを獲るには並大抵の事では不可能に近いだろう。

二つ

例え潜入できたとしても、その女の子だらけの周りの視線に耐えられる程の精神力。

もし仮に秘密の花園（女子中学）へと合理的な理由をつけ潜入することが成功したとしても、ソコはある意味宝の山でもあり、地雷だらけの戦場でもあるのだ。

ここで殆どの男が、その女の子達（宝）の視線（地雷）に耐え切る事が出来ず、逃げ出すのだ。

まだまだ、壁は在るが一つ一つ言っていたらきりがないので省略する。

つまりは俺が言いたい事は……

「おまえらの宿願は今、ここに果たせれるっ！」

俺は、おまえらの屍を越えて行くっ！」

勇者俺は今禁断の聖地への道を歩き出したのだった……

って、え？マナたんやタカミチ先生はどうしたのかった？

取り合えず、タカミチ先生は霊を纏わせて、誰にも見つからない様にして土の中に埋めてるよ。

勿論頭だけ出してね。タカミチ先生は気絶してたし、幾ら交渉に使うって言っても俺を殺そうとしてきたのはチョツと許せないから、ある程度痛め付けてきたから意識が戻っても、土の中からは抜け出せ無いだろう。

そして俺の愛犬、マナたんは……家に帰しました。

いやーねえー、そのまま俺の部屋で飼おうかとも思ったんだけどね？

やっぱりソレは今の俺の立場じゃ無理かなって冷静に判断した訳ですよ。

だから取り合え今日は、『俺の事を誰かに教えてはイケない』って言うって帰したよ。

勿論ソレを破ったり、何かしら俺に害が在る行動をしようとしたら、その首輪が絞まるぞ。』とは忠告して置いた。

でもその時に『ご、御主人が近くに居ない時に首輪が絞まったら、一体どうやって首輪を緩めれば良いんだっ!？』とか、何か必死に聞いて来たのは、とっても可愛かったな。

思わず抱きしめなくなったよ。

マナさんと別れた後、一度部屋へと帰って汚れた服を着替えて来たから、女子中学まではまだまだ時間がかかるな……ん？

前から誰かが歩いて……いや、あれは遠くから見てもハッキリと分かるな。

教師のスーツからは余りにもに掛け離れた、真っ黒なスーツと真っ黒なサングラスにオールバックと言う髪型、そんな姿の人はこの麻良帆学園で俺は一人しか知らない。

「おーい、神多羅木さ〜ん」

周りに人が居ないのをいい事に、俺はそう大声で叫びながらブンブンと手を振りながら、神多羅木さんの元へと走る。

神多羅木さんは、俺の声に気が付いた様だ、立ち止まっている。

「おー榎か、久しぶりだな。」

聞いたぞ今日学校を休んだそうだな。

はあ……またサボりか？」

「んーや、違うよ自主休学だ。」

それと三日振りは、久しぶりとは言わねえんですよ？」

全くボケたのか？このヒゲグラは……

「……で、サボりのお前はこれから何処へ行こうとしてるんだ？」

「なんでそんな事言わなきゃなんねーんですかー？って言いたい所
だけ。」

まあ、8年もお世話になった事出しいいか。」

榎が実の両親に縁を切られたのは、彼がまだメルディアナ魔法学校初等部の頃だった。

元々魔法が使えず、魔力は周りの魔法使い達から見れば、雀の涙程も無かった榎。

そんな榎にとって当然魔法学校など、居心地の良い場所である訳も無く、イジメも存在した。

陰口から始まり、無視や面と向かったの堂々とした罵倒。そして暴力に至った。

悩んだ柁は先生や両親し相談をした。

だが両親には当然取り合って貰えず、教師には話してもなあなあにうやむやにされた。

でもそんな柁にある日転機が訪れる。

ソレは柁の度重なる相談に嫌気がさした、一人の教師が言った言葉だった。

『そんなに嫌ならやり返せ!!』

そしてその日、柁はメルディアナ魔法学校を退学になった――

「ほう、学園長に呼ばれたと……一体今度は何をやらかしたんだお前は。」

はあー、とため息を吐く神多羅木に柁は反論する。

「なんで俺が何かやらかした事が前提なんだよ。俺はただやり返しただけだ。」

だから俺は悪くないよ。

あと、学園長が誰にも言うなって言ってたから何をやったかは、秘密ー。」

はあー、と先程よりも大きなため息を吐く神多羅木は「またか」と思うと同時に、「まあ大丈夫だろう」とも思っていた。

今まで柁が問題を起こした回数など数知れない、当然親の代わりである神多羅木はその度に呼ばれる事が多かった。

だがその数知れぬ問題の中で、大事になったのは、ソレこそ1、2回程度だ。

神多羅木は呼ばれても、少し注意され直ぐに帰る許可が下り、柁は悪くても停学や反省文程度だ。

『ただ単に、その程度ですむ、幼稚で些細な問題だったからではないのか?』

そう思う者もいるだろうが、それは違う。

ある者は腕を折られ、またある者は耳をひきちぎられた。
脚を折る鼻を折る、数え切れない程である。

その全てが全てこんなに酷いとゆう訳ではないが（酷いのは、殆どが魔法関係者であるが）それ程の常習犯が反省分と数日の停学程度では少々おかしい。

理由は簡単

『俺はやり返しただけです。』

そんな枉の決め台詞の性だった。

枉からは決して手を出さず全ては、『相手がやって来たから』と、自分の無実を訴える。

その喧嘩（？）も枉は何の武器も使わずただの殴り合い立ったので枉も少しは怪我をする。

一方的で無く、お互いに怪我をしたのなら喧嘩両成敗となって、相手がどんなに怪我をしても、ある程度なら『自分から喧嘩をしたのではないやり返しただけ』と『あくまでも枉は素手での喧嘩』とゆう言い分が効くためだった。

時たま頭に血が上り、杖を抜く魔法生徒もいるが、その時は杖を折られ、一段と酷い怪我を負わされる事は、魔法生徒達の中ではチヨツとした有名だった。

だが、ソレが魔法関係者から枉が嫌われる事を加速させたのは、当の本人は知らないが、ソレはまた別の話し。

つまり神多羅木は今回も上手くやったのだろうと思っていたのだ。

枳を良い意味でも悪い意味でも信用（信頼は出来ない）していたのだ。

余りやり過ぎるなよ

そんな神多羅木の言葉に枳はいはいとテキトーに返事をする。

「それより聞いてよ、俺ペット飼うことにしたんだ。

いつか神多羅木さんにも見せてあげるよ。」 枳は何だかニヤニヤしながら言うが、もう既に慣れている神多羅木は気にしない

「（枳がこんなにニヤついた顔する時は、大抵女の子が関わる時何だが……そんなに可愛いのか？ 少し見て見たいな。）

ほう、楽しみだな。猫か犬か？」

神多羅木は何か盛大な勘違いをしているがそんな事は枳は知らない。

「んーどちらかと言うと犬かな？」

それと、今日泊まってもいい？」

柁の『どちらかと言うと犬』というおかしな言動が少し気になったが、神多羅木は柁のおかしな言動はいつもの事と忘れた。

「構わんが……アイツラも呼ぶんだよな？」

「当然。」

取り合えず瀬流ピコは絶対として……後は式集院さんにも麻雀持って来てって言うてね。」

それは、柁が唯一と言っていい仲が良い魔法関係者達の名前だった。

柁は楽しそうにそう神多羅木に言うと、

「じゃあ、帰りに神多羅木さん所行くから！」

と、返事も聞かずに目的地へと走って行った。

その時の柁の顔は本当に楽しそうな顔だったのは神多羅木しか知らなかった――

「あ、後瀬流ピコに『昨日給料日だったのは知ってるからな』って言うっていてねー。」

14 幽霊（後書き）

さよちゃんをどうやって主人公に惚れさせるか悩んでいる作者です。

出会いは大体考えついたんですが……

なんだかエヴァジェリン（非ロリ）が魅力的に見えてきたのは気のせいだと思っています（笑）

エヴァって封印解いたらチョッとだけでも成長しないんですかね（妄想）

番外 靈 あの使い捨ての行方

時刻不明 魔法世界戦場跡地にて――

『大分裂戦争』

それは今から約21年前発生した、ヘラス帝国対メセンブリーナの大戦争である。

この戦争はとても有名であり、あの大英雄ナギ・スプリングフィールドは、『紅き翼』と呼ばれる少数の仲間とこの戦争を終着へと導き、この戦争の黒幕であった『完全なる世界』の野望を打ち碎いたのだ。

そしてその功績を皆が讃え、ナギ・スプリングフィールドを大英雄、その仲間『紅き翼』のメンバーを英雄と呼ぶようになったのだ。

多くの人が死んだその大戦争の残骸。

誰もが忘却の彼方へと追いやり、誰もが決して近寄らない、忌み嫌われた場所。

そんな場所にソイツは居た――

強く乾いた風が、誰も居ない瓦礫だらけの荒野を吹き抜ける。

ソレは残骸

この荒れた荒野の様に誰もが忘れて行く、争いの後に残った絞りカス

この乾いた強風の様に役目を終え、ただただそこにいるだけの使い捨ての絞りカス、初代アーウェルンクスはソコに居た。

番外1幽霊

——あの使い捨ての行方

彼は待っていた。 自分が消える時を、この世から消えて無くなる事を――

彼にこの世に対する未練など無かった。

彼は造られた存在。

あの大戦争の黒幕によって造られた、ただの道具。

彼に意思は無く、ただただ戦争の為に働く道具。

代用など幾らでもある、いつ死んでも構わない存在だった。

「……………」。

彼は空を見つめる。

荒れ果てた荒野に転がる瓦礫に座り、ただただ曇天の空を見続けた。

あのナギ・スプリングフィールドに殺されてからの数年、彼はこの荒地をさ迷い歩いた。

だが、それはただあてもなくさ迷っていたわけではない。
彼は希望を抱いていたのだ。

彼は成仏が出来ない。

元々造られた存在の彼は、魂こそ有れど所詮造り物。 紛いものだ。

例えばどんなに人間らしくとも、例えばどんなに完璧に造られたとしても、所詮は紛い物。 そんな物が輪廻の輪に入ることなど許され無かった。

だから、もしかしたら自分を喰ってくれる者（霊）がいるかも知れない。

そんな希望を持ってさ迷い歩いていた。

だが、そんな些細な希望さえ打ち砕かれたのだ。

自分が喰われるには彼は強すぎた。

霊と言つには、意識が残り過ぎているどころか、全く失っており、ず、一片の失っていない。

人と言うには、肉体がない。

結果、彼を喰う者が現れる所か、弱い霊は近寄るだけで霊力……
煉を吸収され、消えて無くなる。

だから彼は待っていたのだ。己の造られた魂が擦り切れ、この
世から消えるその時を――

――そう

「うっは！超強力♪　ねえ、何やってんのー？」

あの時まで――

番外 霊 あの花面の行方

始まりは、紺野 花がある裂け目を見つけた事だった。

その小さな裂け目は、今にも消えそうに『チヂチッ』と音を上
げていた。

本来ならばそんな怪しい物に、花は手を出したり……はするが、
シツカリと考えて、場合に寄っては触れることを見送ったりもす
るのだが。

今回は違った。

何故かって？ 理由は簡単。

今にも消えて無くなりそうな、その裂け目の奥から、とてつもな
く途方も無い、花が思わずニヤつく程の果てしない『怨』を感じ
たからである。

そして花はその裂け目に手を伸ばした――

番外2 幽霊

——あの仮面の行方

一つの仮面が在った。

真っ白な色で口は無く、耳も無ければ、何も無い。

ただ在るのは鼻の様に仮面の真ん中を遮る板らしき物と、深い深い闇の穴の様な目が四つだけだ。

普通の目の位置ともう一つずつ、その真下に、正方形の角を形取るかの様にその穴（目）は存在していた。

私は残りカス。

あの物語の残りカス。

その物語の残りカス。

此処は幽世^{かくしよ}、あの世とこの世の狭間に在る、幻の領域。

私はティキ、怪人ティキの残骸。

本体は、既にこの世におらず、あの世で永遠の地獄を味わっている。

故に私は残りカスで意識は無く、目的も無い。ただこうやって、この仮面が風化し崩れさって行くのを待ち続けだけ。

外に出ようと考えた事も在った。

だが幽世の外にでようにも、私には力が足りない過ぎる。所詮仮面に微かに残った煉のカス。

そんな力は自力で集められる訳もない。

私に在るのは怒りと嫉妬と憎悪と絶望だけだった。

ああ、懐かしいね。

そう私は懐かしむ、あの頃のことを、そしてあの時は思いもしなかった。

あんなに絶望していた私が、こんなにも憎悪と怒りと嫉妬と絶望で彩られた、愉快で楽しい楽しい、毎日をおくる事を。

確かに柁様は中々厳しく、ミスをすれば手足をもぎ取れる事や、煉を根こそぎ吸い戻して、その場に捨て置いたりすることもしょっちゅう。

だが、全てが許される。

柁様はすること成すこと全てが『正義』なのだ。

何故かって？

そんなのは決まっている、当然だろう。

なんだって、彼が我々の『家』であり、『法』であり、『国』で
あり、『王』なのだから――

15 幽霊（前書き）

遅くなりました

やっと、あの娘が登場……？

ああ、視線って痛いんだね。

もうやめろよ、やめてくれよ、こっち見んなよ、指指すなよ。

もう俺のライフはゼロだ。

でも――

「あ、可愛い子めっけ。」

本能には逆らえません。

閑話休題

放課後だから人が多いのか？ 視線が痛い。

いやホント「変態？」とか小声で呟きながら、コソコソするのは止めてくれ！

くそっ！ そっちがその気なら俺だって舐めるように見つめてやるっ！。

って、ヒソヒソ声がチョッと増えた様な気がする……グスン

うおい！ お願いだから教師呼ぼうとしないでくれっ！

もうホント、心が痛いよ……

それにしても、ところどころにカラフルな髪がちらほら。アレは絶対自毛じゃ無いよね？ね？

一体何人だなにじんって話だよ、可愛いからいいけど。

——ヒソヒソヒソヒソ

あー、もう駄目だ。計画していたナンパは、もっと人が少なくなっただけにしよう。

しょうがない、最初に学園長先生の所に行くか……

『おいで』

霊達が俺に纏わり付き、存在を薄くする。

女の子達は俺が居なくなつた事に少し驚いていたが、直ぐに興味を無くし視線を外した。

よし、それじゃあ学園長室に行くとするか……って、

学園長室ってどこだよ？

・ ・ ・ ・ ・

ヤツと見つけたぜ！？

ここまでたどり着くのに、かれこれ30分は掛かつたぞ？

だが、学園長室を探している間にたまたま見つけた、更衣室に侵入しなかつた俺を褒めて欲しい。

女子中学生の生着替えだぞ？ 想像しただけで興奮してくるわっ！

まあ何はともあれ、ヤツと見つけた学園長室だ、サッサと入ろう。

あつ、ノックは忘れてないよ？

コンコン――

「失礼しまーす。」

扉を開けたその先には、

「おおお、よくきたの榎君。」

妖怪がいました。

▲

▲

▲

「して、柁君は何が望みなんじゃ？」

近衛近右衛門は椅子へと柁を促し、座って直ぐに笑顔でそう柁に問い掛けた。

近衛近右衛門は早々にこの問題进行处理したいのだ。

噂や情報とゆう物は、本当に何処から漏れるか分からない。

今こうしている時も、誰か土に埋まっているタカミチ君（柁が電話で言った。）を見つけてしまわないか心配だったのだ。

もっとも、柁はそんなへまなんてするわけもなく、シツカリと靈を多めに纏わせて来たので、そんな事は杞憂なのだが、学園長がそんなこと知るわけもなく、少しでも速く解決しようと表面にはださないが、焦っていたのだ。

だが、柁もそんなことを知るわけもなく、笑いながら言う。

「いやー望みだなんて……そうですね、世界の半分！　なんてダメですか？」

大概おふざけである。

「……………」

近衛近右衛門は少しの苛立ちを隠し、白い眼で柁を見つめる。
心無しか少し口がヒクついていた。

「あ、あれ？ 知らないんですか、ドラゴンクエスト？」

近衛近右衛門はイライラを隠しても、柁はなんとなくその苛立ちに気が付いた。

「……………」

「……………」

気まずい長い沈黙の末、近衛右近衛門が選んだ選択は……

「……………して、柁君は何が望みなんじゃ？」

テイク2でした。

「……………望みだなんてそんな大袈裟な、ただのお願いですよ。」

当然柁はここでもう一度同じ事を繰り返す程、空気が読めない訳ではないので、次はシツカリと返す。

「して？」

「いやぁー魔法世界旅行に行きたいなーなんて。」

柁は気まずそうに言うが、近衛近右衛門は少し驚いていた。

近衛近右衛門は元々、一連の事件の隠蔽の為ならば、多少無理難題であっても出来る限り、承諾しようと思っていたからだ。

だが実際に要求を聞いてみれば、魔法世界への旅行。正直近衛近右衛門にとっては拍子抜けだった。

だが近衛近右衛門は知らない。

柁が魔法世界へと行きたがる、本当の理由を……

もし柁の本当の目的を知ったら、近衛近右衛門は断固拒否、決して柁を魔法世界には行かせないだろう。

理由はともかくも、ただでさえ一定の戦力をもっていると思われ、しかも柁の魔法（だと思っている）は未知数。

そんな不確定な者の戦力強化など、心の内では決して認めたくない。

なにかしらの、理由をつけ断るのは目に見えていた。

勿論柁は、却下される事が分かっている事を、わざわざそのまま告げる程馬鹿ではないので『魔法世界に旅行』と具体的な事は言わ

なかったのだ。

「ふおおおお、魔法世界へ旅行にかのう……いいじやろう。

な」に、安心せい。学校の方は短期留学とでも何かしらの理由をつけて、公認欠席にしておくからの。

思う存分楽しんで来なさい。」

人は、自分が思っていた以上に、損失が少ないと大抵の人物は、嬉しいがる。

そう、その例に漏れず、予想していた過度な要求とは違った、対して金もかからず旅行の許可という、安易な要求に、近衛近右衛門は機嫌が良かった。

「いやあ〜ありがとうございます。実は最悪出席日数が足りなかったら、留年も考えてたんで。」

「ふおおおお、それは良かったぞい。

で、出発はいつにするんじや?」

「そうですね……じゃあ——」

▲ ▲ ▲

「H E I ! 彼女！ ちょっと俺とお茶しない？」

「H E I ! 彼女！ ちょっと俺とお茶し……」

「H E I 彼女！ ちょっと……」

「H E I 彼………」

ちくせう

誰も言葉を返してすらくれねえよ……

それどころか、悲鳴上げて逃げて行きやがった……
なんだいなんだい、そんなに俺顔は悪くないと思うんだけどなあ
I。

ハア、そろそろ人もいなくなってきたし、次で最後にするか。

しょうがない、俺は次のターゲットに全てを賭ける。

取り合えず電話番号を渡せばM i s s i o n C o m p l e t
eだな。

そう意気込んでも、人も少なくなってきた為、中々ストライクの娘が見つからない。

いくら俺でも、女なら誰でもいいってわけじゃないんだぜ？
俺にだってしっかりと好みのタイプってのがあるのさ……まあ、スゲー範囲は広いけど。

人も少なくなつて、少し焦りながら俺は辺りを見回した……

ピコーン

ターゲット発見！ 白髪だけど一人でベンチに座り「ほわ〜」と雲を見ていて、とても保護欲を掻き立てられる可愛さ、文字通りド・ストライクでありますっ！

——Mission Start！

16 幽霊（前書き）

1 2 / 2 1 後半大幅？修正

16 幽霊

「いやー、手応えありだな。」

柩はそう言いながらガッツポーズをする。

結果から言えば、柩の Last Mission と言う名のナンパは成功した。

名前だつて知る事も出来たし、携帯の番号だつて渡す事が出来た。

流石に時間が時間なのでお茶の誘いは自重したが、おおよそ大成功だ。

ただ一つ……そう、ただ一つの誤算を除いては。

頬はまだ赤く顔の熱もまだ引かない。

「あの娘^{マジ}真剣かわゆす」

あれ、マジで彼氏いないの？

幾らなんでも純粹過ぎだろ……

いやっ！まさか、アレはキャラ作ってるっ！？ そう、彼女……『相坂 さよ』は純愛主義で純粹フェチな柩には、ドストライクだったのだ。

日はもう殆ど見えなくなり、周りは既に薄暗い。

柁は何とか興奮する心を沈め、学生の誰もが帰宅を想像する、そんな時間に柁はある扉の前に立っていた。

だがそれは一瞬。

俺はコレから戦いへと挑むのだ。何時までもこうニヤついて何か
いられない。

先程のガッツポーズをとり、心を落ち着けると、次の瞬間には何
の躊躇も無く、ノックも遠慮も無く、まるでわが家に帰る様にマン
シヨンの一室に入って行った。

・ ・ ・ ・ ・

小さなテーブルの上には一つの台。

今、その台の上では4人が白熱した闘いを繰り広げていたっ！

地和！（チーホー）

「なっ!!」

大車輪!

「うおっ!」 清チンイッ一色ドラ10!

「まだまだ……!」

少四喜!(ショウスーシー)

「これからだぜ……」

流し満貫!

「……………」

戦いが終わった後には、3人の勝者と一人の敗者だけが残され
て……

だが勝者である3人は、一人うなだれる敗者を気にも止めず、話
し出す。

「流石神多羅樹さん。
流し満貫とは渋かったですね。」

「……そうでもないさ。」

「でも式集院さんの大車輪も凄かったですね。」

「はははっ、それを言うなら瀬流彦君も地和^{チホ}なんて幸先が良かったじゃないか。」

先生達はお互いの勝利を讃え盛り上がるが、その中に唯一ただ一人いる生徒であり、敗者でもある、柁だけは絶望していた。

開いた口が今だ塞がらない。

「……元気がないぞ。」

元気がない？ そんなの当たり前だろう？

「まさか、そんな……俺があおせるピコに、せるピコなんかに負けるなんて……ッ！」

そう柁は涙を流す。

柁は麻雀が大して強くは無かったが、それでも今まで楽しく行う事が出来たのは、柁以上に麻雀が弱い瀬流彦の存在が在ったからだ。

故に柁は嘆き、

「んんっ、あれれ？ どうしたのかな？ 柁くん。僕の給料日がどうたら言っていたらしいけど……あっ！」

そういえば一昨日は柁君の小遣い日だったよね？

あゝはっはっはっハッハッハッ！」

瀬流彦は笑うのだ。

「やめんか瀬流彦、大人気ない。」

「全くだよ。まあ遠慮する気はないけどね。」

神多羅木と式集院はそう言い、瀬流彦を咎めるが彼は遠い目をして反論をする。

「神多羅木さん、式集院さん。」

僕が今まで何度負けて来たか知ってるでしょ？

僕が今まで何度財布を空にしたか知っているでしょう？

どれだけこの日を待ち望んだろうか！

あの恨み、ハラサデオクベキカツ！」

「「はあ……………」」

何か変なモノを受信した瀬流彦を止める者は、もう居なかった。

「さあ、諭吉の貯蔵は十分かつ!？」

▲
▲
▲

チャカチャカ チーン

「合計、二万九千七百五十円になります。」

「……………」

ああー俺死んだ。絶ってえー死んだよ。

え？ 死因？

そんなの餓死に決まってるだろーがぁ！

ちくせう

こんな事なら、せるピコにモウチョツと優しい要求すればよかったよ……

神多羅木さんはお酒とタバコ、いつも道理だ。

式集院さんはケースにある肉まん類全て、これも良いだろう

だがせるピコ、お前えは駄目だ。

チケツトなんてめったに買わないから、コンナニも高いとは思わなかったぜ……あのやろうコンビニ限定ってゆう、ルールの際？を突きやがった！

だがそれは俺が負けたのが悪いんだ。だから文句を言ってもしょうがない、せるピコが勝者である以上、悪いのは俺であり、正義はせるピコだ。

今回は諦めて、パーっと楽しむかつ！

証は気を取り直して帰宅し、扉を蹴り飛ばし言うのだ。

「うへえーい、買ってきたぞこの野郎っ！」

▲ ▲ ▲

「大丈夫かのタカミチ君？」

近衛近右衛門は地面に埋もれたままのタカミチに問うが、彼はまだ気を失っているようで、答えは返ってこない。

「ふむ、なるべく早く事情を聞きたいのじゃが……タカミチ君も生徒相手に手加減しながら戦ったんじゃし、明日までまとうかの。」

近衛近右衛門はいつものように、ヒゲを撫でながら悩む。

タカミチは確かに手加減をしていた。

だがいくら自分のクラスの生徒が危機であつたとしても、柁もこの学園の生徒には間違い無い。

そして柁の力は確かに脅威だったが、それはあくまでも生徒として、そして魔法生徒としての脅威だった。

故にタカミチが最後に放った居合拳。それは魔法の防御を破り、柁を気絶させられる事ができる、程度の力を込めた筈だった。

だが、その拳は何にも遮られる事も無く柁へと向かって行つたのだ。

自分の拳が柁の拳を貫く所で、タカミチの意識は途切れたのだった。

「うむ、タカミチ君の安全は確認した。

ならば次は、柁君を魔法世界へと送らねばならんの……はあ、事情を聞いてから柁君を送りたいんじゃないが、今を逃したら次に魔法世界へ行けるのは2週間後、それに約束は約束じゃ。」

多少思い残しはあるが、そう決断した近衛近右衛門は、おもむろに携帯電話を取り出し、誰かへ電話を掛けるのだった――

▲ ▲ ▲

今にでも降り出しそうな曇天の空が、月の光に照らされる深夜。

柩は既にもう魔法世界へと行く準備を終え後は学園長からの電話を待つのみだった。

準備と言っても、先程までどんちゃん騒ぎをしていた、着の身着のまま行く訳だが……

ブルブルブルツ――ピッ

待ち兼ねたその電話に柩はすかさず出る。

隣の寝室で寝ている、神多羅木さんを起こさぬ様に、

『はい、もしもし』

『柩君、タカミチ君の安全は確認はすんじゃぞ、約束どおり手続きは全て済んでおる。』

『そうですか、どうもありがとうございます。』

『いいんじゃないよ、約束じゃ。』

真名君の件もチョツとした勘違いだったようじゃし、この一件の事は忘れて、思う存分楽しんでくるんじゃないぞ。ホォツホツホツホツ——』

『ありがとうございます。
ではっ……っ』

ピッ——

電話を切ると同時に柁は動いた。

今すぐにでも笑いたい気持ちを抑えて、既に準備を終えた、多少の手荷物を持ち、玄関へと向かう。

ガチャ——

扉を開き、既に就寝した、父親の代わりの様な存在だった神多羅木を起こさぬように小さな声で、しばしの別れを告げようとして、少しだけ寂しくなった。

（今まで月一で今日の様にこの部屋で、せるピコ達と馬鹿騒ぎしてたが、それも数ヶ月はお預けか……）

だが柁は、言うのだ。

自分の願いを叶える為、その先に在る更なる目標を達成する為に。

だから――

行ってきます。と――

▲

▲

▲

あの夜から数ヶ月たった、ある日の夜。

どこまでも広がる闇にその笑い声は酷く響いた。

「ウケケケケケッ」

そう、その夜、一人の青年が数ヶ月振りに麻帆良学園に帰ってきたのだ。

だが、彼は此処に帰ってきたことを懐かしもせず、喜びもせず、ただただ笑うのだった。

自らの願いを叶え、再び此処へと帰還した彼の雰囲気は、数ヶ月前までの彼とは全くの別物だった。

だが故に彼は笑うのだ

この金色色に輝く不気味な月を背に

多数の霊を従えて

腐った瞳で

たった一人

王の如く

。

16 幽霊（後書き）

遅れました申し訳ないです。

最後を読んで頂ければわかりますが、時間が一気に飛びます。

んでもって魔法世界 戦力増強編！は番外でチヨロチヨロ投稿したいと思います。

最後に、本当に遅くなって申し訳ございません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8855s/>

嫌われ者は霊使い！？

2011年12月21日01時48分発行